
COBALT SERIES
ライエノーツ
エクサール騎士団 1
新世界
若木未生
集英社

あきらは十歳のとき事故で両親を失い、遠縁の来生芳秋の養子になった。そこには彼女同様の立場の衛、閃、貢がいて、四人は兄妹として育ち、四年が経った。三人の兄は、普段は、芳秋の経営する喫茶店を手伝ったり、学校へ通ったりしているが、真の姿は異界からの使者。あきらとて普通の女の子ではないのだが、彼女自身はまだそのことを知らない。そこへ、葉月奏太という少年が現れた……。

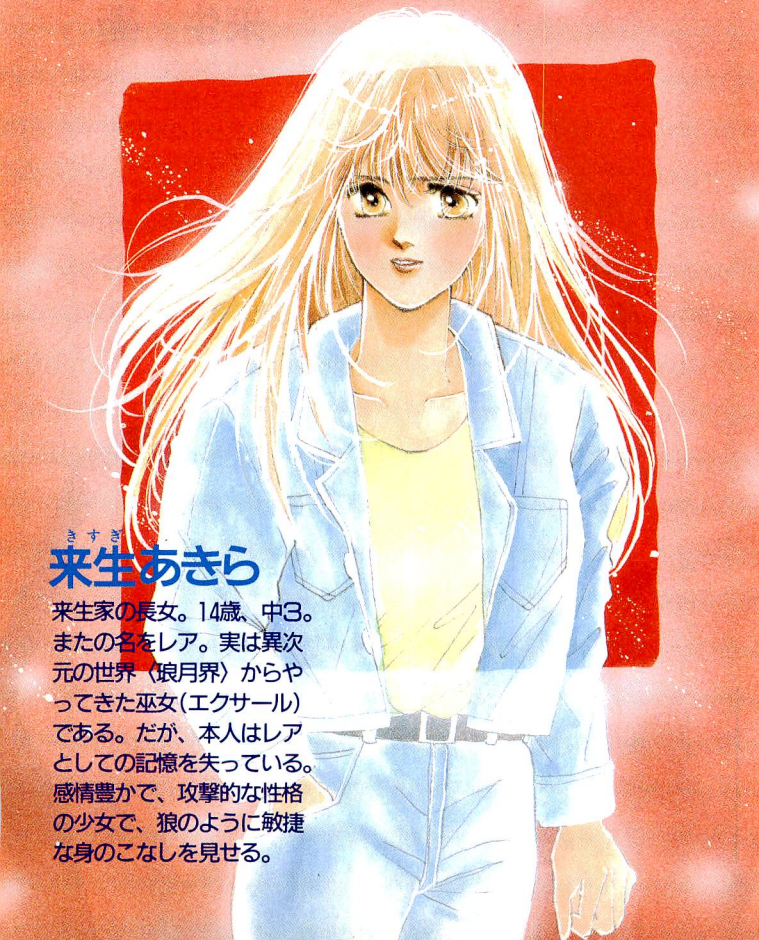
恋を夢みる乙女のための小説誌!

[コバルト]
Cobalt

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売
隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。
集英社

エクサール騎士団 1

新世界



来生あきら（きすぎ）

来生家の長女。14歳、中3。またの名をレア。実は異次元の世界〈狼月界〉からやってきた巫女（エクサール）である。だが、本人はレアとしての記憶を失っている。感情豊かで、攻撃的な性格の少女で、狼のように敏捷な身のこなしを見せる。

来生　貢（みつぐ）

来生家の三男。16歳、高1。またの名をユーマ。水を使う守護者。中性的なルックスで、巧妙に母性本能をくすぐるタイプ。家事一般をとりしきり、来生家の家計を握る実力者(?)である。

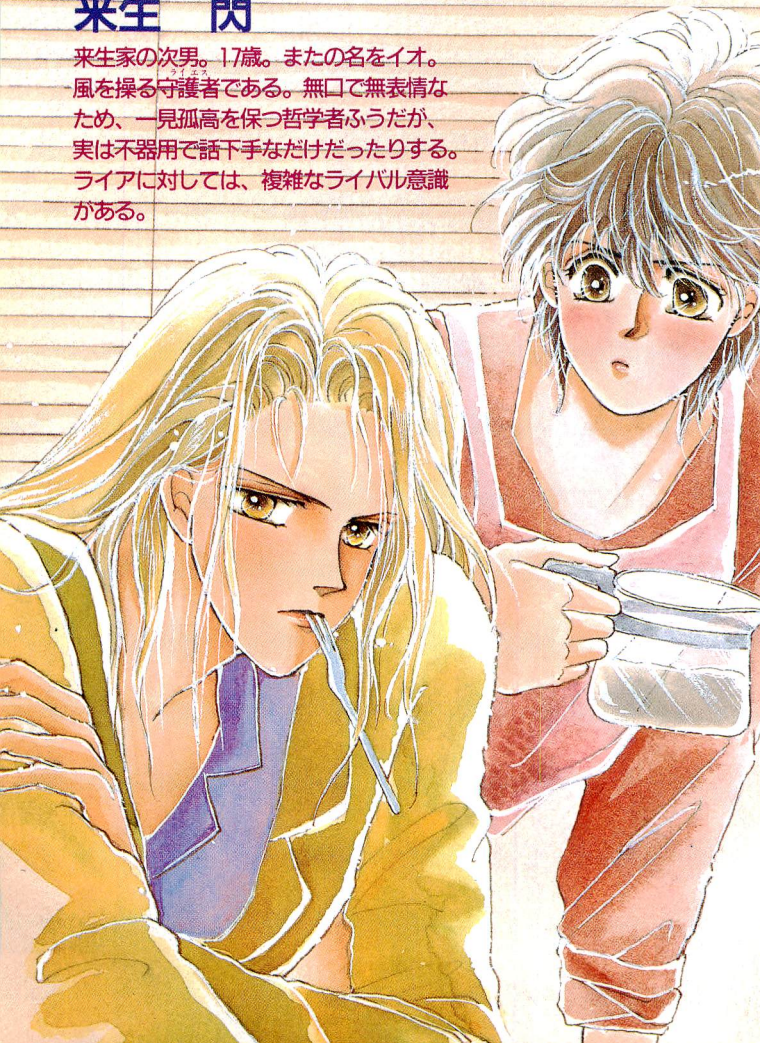
来生　衛（えい）

来生家の長男。19歳。またの名をライア。エクサールの守護を使命とする超能力者・ライエスのひとり。光を操る能力がある。優等生ぶっているが、本性はけっこうなエゴイスト。あきらへの兄バカぶりはただごとではない。



来生　閃（せん）

来生家の次男。17歳。またの名をイオ。風を操る守護者（ガーディス）である。無口で無表情なため、一見孤高を保つ哲学者ふうだが、実は不器用で話下手なだけだったりする。ライアに対しては、複雑なライバル意識がある。





葉月奏太（はづきそうた）

あきらと貴が事故から救った少年。実は《銀月界》の神官アスタルト。彼の野心のために《銀月界》は圧壊し、あきらたちがこちらの世界へ送りこまれた。あきらのレアの能力を復活させようと企んでいる。

イラスト／羽音こうき



COBALT-SERIES

エクサール騎士団（ライエノーツ）1

——新世界——

若木未生

集英社

目次

エクサール騎士団 1
序……10
第一章　戦乱の予感……18
第二章　エクサールの守護者……67
第三章　望郷の果て……114
第四章　大破壊……161
用語解説……194
あとがき……196

イラスト／羽音こうき

エクサール騎士団1
――新世界――

序

完全なる閉鎖球の内面を大地とし、その中点を天となす。
天のさらなる中央に浮在するは央界神殿。
神の祝福を約されし〈月斎の地〉。
滅びを招くも、また……古よりの約定なりしか。

＊＊＊

透青石の柱が大きく揺らぐ。何度も何度も。
祭衣をなびかせ、回廊を風のようにひとりの青年が走りぬけてゆく。ふたたび大地が咆哮する。天空の呻き。
どこもかしこも虚無の大気に占められていた。北西極の亀裂から、まるで地をひしぐがごと

く侵蝕した暗黒は、すでに神殿の真上まで迫っていた。
「ライア！」
声をかぎりに、彼は叫ぶ。浅黒い肌。ひるがえる髪は金褐色の波をおこす。
「どこにいるのだ、ライア!?」
人影はなかった。彼以外の者の気配は、この央界神殿より失われてしまっていた。
永劫につづくかと思われる回廊の一点で、彼は立ち止まった。
凍てついた金褐色の瞳が、まっすぐに眼前の闇を見つめた。かすかな、しかし深い絶望がその面をよぎったようだった。
「――ライア」
今一度だけ、彼は呟く。
「どこへ、お連れしようというのか……どうしようというのだ、あの方を」
彼女を。
轟音。
なにもかもが悲鳴をあげている。すべてが。あらゆる存在が。

それは、まだ少年らしさを残した若者の声だった。
荒れくるう湖水。雷鳴。幾度も声をとぎらせながら、彼は命じつづける。
「ディレイ・ミンス！」
岩壁へ押しよせる波の塊。
「ミンスよ……！　私の声は、もうおまえまで届かないのか!?」
鈍い灰色に染まった天は、今や暁にも似た朱の光を帯びはじめていた。いずれ宇宙は紅で満ちるのか？　うつくしくもあざやかな死の色に。
「……そうか」
ふっと曇りのない笑みを浮かべ、〈水使〉の若者は彼方へと目を向ける。
「ならば我が使鍵よ、これが最後の命だ」
紺碧の瞳には、ささやかな自嘲の影。
容赦なく彼をなぶり呑みこもうとする水流に対し、彼は平然と言い捨てる。
「どこにでも行っちまえ!!」
叫喚。恐怖。嵐、嵐、嵐。

「もう……駄目です」
美しい乙女はふりかえり、そう告げる。
「行ってください。これは私の罪。私の咎。伝えて下さい。夢まぼろしでなく……確かに私たちの愛は在ったのだと」

こまかい亀裂に覆われ、そして次々に砕け去ってゆく透黄石の壁面。
狂ったようにひとりの男が笑いつづける。肩をおさえた指の間から流れおちる鮮血と、知らず両眼より溢れる涙とで全身を濡らしながら。
「滅びるがいいさ」
その呟きのあらわすものはおそらく至福。
「昏迷の闇よ……せめて証となるがいい」
道化芝居の愚かな結末を語るがいい……！
神官のみが身にまとう灰斎衣を、喉元より自らの指で彼は引き裂く——呪わしく。

そして瞳は閉ざされる。

＊＊＊

暴風がアスファルトの路地を渡り、ちぎれた紙片やつぶされた空き缶をにぎやかに舞わせては打ち捨てる。

雲は闇空を走り、星は姿を消していた。まるで街全体が死にたえたように沈黙し、がたがたと風に震えていた。

午前三時。

店のシャッターが、激しく何度も叩かれた。

喫茶店『海』のマスターは、当然のことながらベッドの中の住人だった。鳴りひびくシャッターの音は、あくまで風のいたずらだろう。反射的に彼はそう思いこもうとし、三十秒間ばかりはその試みに成功した。

が、やがて切れぎれに届いた声は、明らかに年若い少年のものだった。

「誰か……」

疲弊してかすれきった声が、くりかえし呼びかける。

「誰か、頼む……怪我人が……！　お願いだ、この子だけでも……！」

怪我人？

再び、暴風があらゆる音を遮った。

先日とうとう五十になってしまったばかりの店主は、この建物にただひとりきりで住んでいた。そしてこの店は商店街から一軒だけ外れ、小さな林にかこまれてぽつんと建っている。

数瞬の逡巡ののち、結局彼はベッドをぬけだした。ガウンをはおり、階段をおりて一階の店へ出る。

「シャッターはあかないよ、脇のドアにまわりなさい」

眠気の消えないまま声を投げると、シャッターのむこうで足をひきずる気配があった。

「おい、こんな天気だってのにどこぞで集会でもあったわけかい？」

さばけた口調で問いつつ、案外シャッターをたたいた少年のほうもかなりの深傷を負っていておかしくない、と声の様子から主人は悟っていた。五年ほど前までは、彼は現役の外科医だったのである。

おそらくどこかの不良少年だ。下手に警察あたりを呼んだら逃げてしまうかもしれない……それよりは、怪我人をなんとかしてやるのが先だろう。

「しかし……実は強盗なんかだったりしたら困るなあ……」

呑気といえば呑気な態度で、やや肥満ぎみのマスターは裏口のチェーンを外す。ごうっ、と

冷たい風が圧力となって扉をおしのけた。

と――。

影の塊が、息をきらしながらドアの内側へ転がりこんできた。背の高い、だがまだ十代半ばの少年がひとり。そして彼の腕には、深い眠りについた幼い少女が、しっかりと抱かれていた。

「助けてやってくれ……！」

血を吐くように少年が言い、直後、がくりと前のめりに両膝をついた。とっさに手をさしのべようとして、はっとマスターは息を呑んだ。

少年の瞳は琥珀、そして髪は黄金の光をはらんでいた。抱かれた少女は、まだ生誕から十年を数えたかどうかも知れない幼さながら、どこか凛として気高く、潔い美とでも呼ぶべき特異性を備えていた。長い濃褐色の髪が少年の腕からこぼれ、風のなかで鮮やかに舞っていた。

彼女は眠っているようだった。だがそれは正しい観察ではなかった。

「――その子、か!?」

尋ねる声に衝撃が含まれた。

彼女の全身は数えきれない傷に覆われていた。まるで鋭利な刃に切り裂かれたように。それは無惨な光景だった。

すでに語る力も失われたのか、少年は苦しげな頷きだけで問いにこたえる。

「なんてひどいことをするっ……」

一般的とはとても思えぬ少年の外見についても、神秘的すぎる少女の容貌についても、今は気にかけていられなかった。主人――来生芳秋がまずおこした行動は、少年からその少女――かつてメサイエ・エクサール・レアと呼ばれた少女を、両腕にひきうけて、さらに暖かい家のなかへと運びこむことだった。

……新たな物語の発端は、これより四年後のこととなる。

第一章　戦乱の予感

I

「あきらああっ！」

その朝も、いつものとおり、一階の台所から二階めがけて放たれた怒鳴り声から始まった。

「目覚ましはとっくの昔に鳴ったじゃないかあーっ！　何回呼ばれたら起きるんだ、この眠り姫っ!!」

続いて、ばたばたとスリッパを鳴らして階段をのぼる足音。

二階の廊下南側つきあたり、角になったところを利用した小さな部屋へと声の主はとびこんでゆく。

「いいかげんに起きないと襲うぞっ!!　三年寝太郎と呼ぶぞっ!!　買ったばかりのあきらのリーボックはいて学校行っちゃうぞっ！」

ベッドに向けて怒鳴ったのは、エプロン姿の来生貢、当年とって十六歳、当家の三男にして

炊事掃除洗濯の担当者であった。

生半可な女性よりもエプロンが似合ってしまうのは、その優しげで中性的な外見によるところが大きいだろう。だが外側の線の細さは、必ずしも内面とは一致しないものである。

「はやくあきらが起きてこないとトーストも焼けやしないっ！　冷めたトーストにバターを塗る空しさだけは許せないものがあるし、卵はやっぱりボイルドよりはスクランブル、それにベーコンがついて、それでもって糖分ひかえめヨーグルトだってちゃんと用意してあるんだから、わかったらさっさとベッドから出て顔を洗って服を着て食卓へおいで！　三十秒以内だぞ、いいね、わかったねっ!?」

ひとしきりまくしたてて、彼はまた勢いよく階下へと走り去ってゆく。ベッドの中からは、もごもご、とこもった返答が漏れたようだった。……が、それだけだった。

三分後。

ひたひたひた、と今度は音もなく、しのばせたような気配が同じ部屋の扉へたどりついた。先客がごていねいにも開けはなしていったドアの前で、一瞬だけその気配は立ち止まる。ただし、この奥へ進むべきか迷ったというよりは、目的地がそこであることを確認しただけ……ではないかと思われる。

結局、彼は五歩ばかり室内へ踏みこみ、そこでまた足を止めた。ここまで来たはいいが、さ

て当初の目的は何だったのか、とぼんやり考えているような——乙女の寝室の中央で本当にそんなことを考えているとしたらかなり不気味なのだが——得体の知れない空白が数秒間。

肩まで伸ばした褐色の髪。日に焼けて、そしてやや冷たい印象の顔立ちは、どこか野性的なうえに鋭く、ここでその表情にあとわずかでも緊張感が含まれていれば文句のない美貌と呼べただろう。いかんせん、立ったまま寝ているような現状では、ボーッという擬態語以外に彼を形容する言葉がない。

四畳半の室内には、ベッドと机とクローゼットが一つ収まったくらいで、余計な物はできるだけ省かれていた。かろうじてベッドカバーと、カーペットと、南向きの窓にかけられたカーテンの合計三点が女の子らしい明るい色調でまとめられているが、他の部分はシンプルといえばシンプル、殺風景といえば殺風景である。

と。

「あにゃ？」

ベッドの中でごそごそと動きがあり、布団のあいだから片目だけがのぞいた。

「あやー、せんちゃんらー、おひゃよー」

「……おはよう」

ねぼけきった無邪気な声に、起きているのかわからない単調な声で応えると、彼はくるりと

方向を転換した。そのまま、ひたひたひたと相変わらずの足どりで部屋を出てゆく。

……そうして、当家の次男こと来生閃十七歳が階下へとおりてゆく頃には、ベッドの中ではふたたび幸せな寝息が再開されていた。

さらに三分後。

前ぶれもなく、南向きの窓にかかったカーテンが勢いよく左右にひかれた。

いつどこから部屋に入ってきたのやら、それはほとんど神出鬼没の世界だった。すらりとした影が窓際に立ち、眩しい陽光をベッドの上へこれでもかと広げてみせたのである。

「というわけで朝だ、あきら」

よく響くハイバリトンの声。

「ついでに言えばたいした晴天だ。ジョギングで町内三周くらいしても罰はあたらないくらい快晴なんだけどね……今から起きて貢の朝ごはんを食べてからでかけたら、必然的に学校までノンストップダッシュになるし、そういう意味でもいいお天気だということは間違いないだろうな」

口調は穏やかだが、言っている内容はそれほど優しくない。布団の奥からもごもごとなにやら文句がおこる。

来生家の長男はそちらをふりむき、そしてわざわざベッドの上にかがみこんで囁きかけてや

る。

「実はね、あきら、ここだけの話なんだけど……」

「ふにゃ？」

空白。

「っ――どおおこ触ってんだよ、ばかーっ!!」

悲鳴というより怒号があがり、がばっと布団をはねのけて来生家の『四人目』が姿を見せた。

「どこって、耳のうしろがわを人差し指でスーッと。だから、この指だけで会話するって先に言っておいただろう？」

眼鏡の似合う長兄は、大真面目にそんなことを言ってのける。十九にもなって未だに小学生みたいな言いのがれを、と妹のほうは憤りに身を震わせた。

「どうやら目がさめたな、よかったじゃないか。新しい朝といえば希望の朝と相場が決まっているし、乙女の朝ともなればさわやかに始まらなければ嘘というものなんだよ、あきら」

にっこりと完全無欠の笑顔で、来生衛は意味不明のトドメをくらわし、さっさと背を向ける。

それから、ふと思いついたように。

「ああ、そうだ、あきら、あんまり乱暴な男言葉は使わないほうがいい。せっかく美人に生まれたんだから、もう少し男を誘惑できる路線に切りかえたほうが利口というものだよ」
「えーちゃんを誘惑できたって嬉しくもなんともないよおおっだ」
そう精一杯の反撃がかえった頃には、彼は速やかに姿をくらましてしまっていた。
賢明な人物であることは言うまでもない……。

来生あきら、十四歳。彼女――誤解をまねきやすい名前だがれっきとした女性である――には三人の兄と一人の養父、合計四人の愛すべき家族が存在した。
「おーはーよー」
顔の半分をばさばさの髪で覆ったまま、ようやく食卓へ現れると、ちょうどオーブントースターが軽やかにベルを鳴らすところだった。
「重役出勤ならぬ、お姫様通学だなあ」
新聞を広げながら、家長の来生芳秋氏がそうコメントした。
かつてはとある大病院につとめる医師だったということもあって、いまだに人のいい大学教授のような印象が強い。どっしりと構えつつ知的で、そしてロマンチスト。商売人には向かないタイプである。

「寝坊だけど遅刻じゃないもん」
伸ばしっぱなしの長髪を片手でかきあげ、あきらは自分の椅子をひく。
「現時点ではね」
隣から口と同時に手も出して、トーストの皿をこちらへ押しやったのは貢だ。じろ、とあきらは恨めしげな目を向ける。
「みっちゃん、あきらの脚を信用してない」
「信用はする！　信用はするから喋る暇があったらさっさと口の中に食糧を供給しなさいっ。あきらが走るのはあきらの自由だけど、一緒に学校に行く人間の身にもなってくれっ」
「……消化のためには」
ぼそり、と貢の向かいから閃が言った。
「よく噛まないと……最低三十回は……そうすると健康と長寿が……」
「悠長に噛んでてどうするのっ！　いいからあきらは食べなさい、ひらめは黙ってなさい！　衛っ、ぼくが鞄をとりに行ってるあいだ、こいつら甘やかさないようにねっ！　ったく、ど――っしてうちの連中はこんなんばっかりなのかね本当にっ」
一気に喋りとおして、慌ただしく貢は二階へと駆けてゆく。『ひらめ』と呼ばれてから十秒後に、ようやく閃が小さく咳きこんだ。



おそるおそる、あきらがそちらをうかがう。
「……『ひらめ』ちゃんって……」
「あきら、卵が残ってる」
閃の隣にかけている衛が、すかさずチェックを入れてあきらを黙らせた。

喫茶店『海』の開店時間は午前十時である。八時頃から、徐々(じょじょ)に開店のための準備が始まることになっている。
「いってきまああすっ」
「みっちゃんずるいっ、ぬけがけっ」
突風(とっぷう)のごとく学生どもが目の前を駆けぬけてゆき、モップ片手に来生衛はそれを見送った。
「あ、えーちゃんえーちゃんっ、今日あきらクラブないからね、時間あったら待ちあわせしよっ」
軽く髪をはずませて、あきらが口早にそんな声を投げた。
「いいよ、じゃあ三時頃に校門前」
やわらかい笑みとともに妹思いの——兄バカとも言う——長男は右手をあげて応えてやる。
とたんに「あーきーらっ！」と貢の悲鳴があがり、高校一年生の三男と中学三年生の長女はふ

たり並んで最高速ダッシュに突入していった。
現在、来生家で教育期間中にあるのはこの二人だけである。
「……三時？」
カウンターの奥から、ぼそりと確認する声があった。
「いかにも」
閃の言わんとするところは承知のうえで、衛はしらじらしく頷いてみせた。
「今日は水曜日だ。ということは俺はC市まで仕入れに赴かねばならない。昼から行って交渉をすましておけば、三時頃にはちょうど青鳳学園に着けるだろう？」
「……俺が言いたいのは」
精巧な陶器細工のように秀麗でなお危うさもそなえる美貌を、ふと伏せるようにして、十七歳の次男は言葉を切る。……現在、自分が手にしている銀のスプーンに見入って……いるのではなく、はたしてそれはすでに磨いたものだったか、それともこれから磨こうとしていたものなのか、少し目をはなした隙にわからなくなってしまったようである。
「閃、それはまだ手つかずだ、確か」
「ありがとう……いや、それで俺が言いたいのは」
「三時といえば女性客が急増する時間帯だったな。経営学的見地から言って、俺はその時間に

当店の花形ウェイターをお客様の前より遠ざける気はない。兄上の御意見としてもね」

眼鏡の奥の理知的な瞳が、いたずらっぽくきらめいて閃を見た。

「……親父様がいる」

上目づかいに、閃は精一杯の抵抗に出る。

「だから、店は大丈夫だろう……。それに、俺はウェイターじゃない。皿は洗うけど……あとは、雑用としてこなしている」

「そうそう、君は雑用とて熱心にこなす優秀な皿洗いだ。そして貢には学校帰りにスーパーの特売めぐりという使命が待っている。となるとやはり、お姫様のお迎えは不肖私めにお任せあれ、というところだな」

王手、と言わんばかりで衛はふわりと微笑した。漆黒の前髪を指で梳きあげて。

「……卑怯者」

「どうぞ、なんとでも」

お迎え役争奪戦には、こうしてあっけなく決着がついた。そもそもこの優等生ぶった、そのくせ本性はとことん利己的な兄貴に、口で勝負してかなうはずがないのだ。それくらい閃も初めから承知している。

博識で人当たりもよく近所では評判の『さわやかお兄さん』が、他人の目にはふれぬところ

でいたいけな弟をいじめて楽しんでいるなんて、ああできることなら町内会全体に言いふらしてまわってやりたい――などと閃が考えたかどうかは不明である。もとより町内会関係のつきあいなど、この不器用きわまりない弟にとっては鬼門にひとしいのだ。

相手に勝る点があるとすれば身長くらいだが、これは閃が高すぎるだけであって、一見柔和そうな衛にしても、いざ腕ずくで一戦まじえたとしたら自分と互角かあるいはそれ以上であることを閃は知っている。

「閃、そろそろ親父様を読書室からひっぱりだして本日の分のブレンドをお願いしよう。俺はシャッターをあけてくるから」

モップをテーブルにたてかけて、衛がそう指示した。学者肌の来生芳秋氏の日課は朝食のあと新聞と専門書数冊を片手にトイレにこもることで、来生兄妹はその現象を『読書室入り』と呼びならわしているのである。

沈黙を了承の合図に代えて、閃が奥のドアへ向かおうとしたときだった。

ふっ、と風が走った。

閉めきったはずの店内で閃の髪がかすかになびき、彼は息を呑んで立ちどまった。店のガラス戸に映った衛の眼差しにも一瞬だけ強い光が宿り、厳しい表情で彼はふりむいた。

言葉は不要だった。目を合わせるとふたりは頷き、そしてそれぞれに次の行動を選択した。

衛は表の扉から、閃は裏の扉から、彼らの愛すべき妹のあとを追って駆けだしたのである。

時はわずかにさかのぼる。

よく晴れた朝である。百メートル走なみのペースで、あきらと貢が疾風のごとく学校をめざすところである。

S区南町から鳥越町までの街道沿いをすさまじい速度で走りぬけてゆく二人の姿は、三年ほど前からこの近辺における名物と化していた。

私立青鳳学園には制服というものがない。

カジュアルにソフトスーツを着こなした小柄な少年と、ブルージーンズの上下を男の子のように着くずした細身の少女が並んで突っ走ってゆくと、嵐でも通りぬけたかといわんばかりの面もちで誰もがふりかえる。男女一組であることはわかるが、どちらがどちらなのかとっさに判断つかない。しかも走る二人の息がぴたりと合っていて、まるで双子のようにさえ見えるのだ。

もっとも、慣れた者ならこう区別するはずである。

動きは速いが常に仕草から優美さを失わないのが貢。軽くて、どこか攻撃的な——狼のように——敏捷な身のこなしを見せるのがあきらである。

「髪が邪魔なんだよね……」
直線コースに入ったところで、あきらがそうぼやいた。もちろん足の速度はゆるめていない。
「切っちゃダメだよ。切られたらますますぼくとあきらの見分けがつかなくなる」
並走しながら貢がクギを刺す。
「そしたら、今度はみっちゃんが髪のばしたらいいじゃん」
「……男が長髪にして何が嬉しいんだっ」
「みっちゃん、今の発言てばせんちゃんに対して失礼だよ」
「閃は面倒くさがって伸ばしてるだけだよ、弁護の余地なし！」
猛スピードで走りながら息もきらさず会話を続けた貢も立派だったが、前ぶれもなくぴたりと走行を停止したあきらも常人とは呼べまい。
いきなりあきらが後方へ消えたため、貢のほうは十メートルほど彼女を追いこしてしまってからふりむかざるをえなかった。
「なっ――何なんだ、あきらっ！」
「みっちゃん……」
じっ、と物言いたげに貢を見つめ、あきらは呟く。

「どうしてみっちゃんは、いつもそーやってせんちゃんに冷たくあたるんだろう……」
「あのねえ、あきら！　今は一秒でも惜しんで走るのが先っ――なんて、聞いちゃいないだろうこの子は……」
「はっきりさせるまで、あきら動かないもんね」
大真面目にあきらはそう言うと、深い色の瞳をまっすぐ貢に向けたまま腕を組んだ。
心の奥まで射抜き見透かすような視線は、あきら本人が自覚しないところの、彼女最大の武器である。
「親しき仲にも礼儀あり、というありがたい言葉がね、どーも我が家では徹底してないと思うよ、あきらは。せんちゃんが心優しいのをいいことに、みっちゃんてば冷たいことポンポン言いまくりで、しかも反省の色がない」
「ココロヤサシイって……」
あれはただボケてるだけ、と言いそうになって貢は慌てて台詞を呑みこむ。
「……だからね、あきらっ！　親愛の表現をイジメと勘違いするのはよくないんじゃないか？　気心あまって悪口百倍っていうだろ!?」
「いいません、そんなの」
「あーきーらー……」

「来生家の家訓は誠意、真心、勇気、親切。あきらはたとえ兄でも人の道にはずれたら諫めるからね、力一杯」

弱冠十四歳とはとても思えぬ迫力で言いきられ、しかも逃げを許さぬ眼差しにしっかりつかまえられては、貢としても素直に降参するしかなかった。

「……わかった！　わかりました、このぼくの言葉が過ぎましたとも、お姫様。あきらの髪に誓って閃にあやまりますから、だからこの場はおさめてくれってば！」

「……」

少しだけ間をおいて、あきらは貢の言葉の真実をたしかめたようだった。

そして不意に、ぱっと曇りのない笑顔が咲く。

「みっちゃん偉い！　だからみっちゃん好きっ!!」

「はいはい……」

これだからなあ、と嘆息しつつ、真正面から好きと言われたら貢のほうもそうそう大きく出られない。結果として、ラッシュアワーのバス通り横、衆人環視の歩道中央で、ほのぼのと兄妹愛の世界などを展開してしまう自分がいるのだ。

「――違うっ！　そうじゃないだろ、あきらっ!!」

来生家でもっとも現実適応性に富んだ貢がハッと我にたちかえったのは、さすがにその直後

だった。本鈴が鳴るまであと七分、しかも高等部の校舎は中等部よりも遠方にあるので四十八秒ほどのハンデを覚悟しなければならないわけである。

あきらを置いて先に行く、という発想がまったく出てこないあたりが、不思議といえば不思議かもしれない。貢に言わせれば、あきらへの愛はそんなハンパなものではない、との一言で片付く。

「走れ、あきら！　超倍速！」

「了解っ！」

だが、それから三秒後、彼らはふたたび足を止められてしまう……。

当の路線バスの運転手および乗客にとっては、それは災厄以外の何物でもなかったはずである。

通勤通学の客でぎゅうぎゅう詰めになったバスは、信号が変わると同時に、重苦しくエンジンを唸らせて発進したところだった。

ようやくスピードにのりはじめた、ちょうどその時、バン、と鈍い音が車体の下で響いた。

続いてもう一度。

「あきらっ、右っ!!」
貢が叫んだのと同時に。
あきらの視線が右後方へ投げられた。
左前輪の破裂した——パンクではなく——バスの巨体は平衡を失い不快な音をきしませながら歩道へと突っこもうとしていた。
避けるのは簡単だった。しかしまず彼女の感覚は三百六十度の周囲へむけて開放された。キーンと耳鳴りのしそうな、凝縮された静寂のなかで、あらゆる状況が一瞬のうちに解読された。
慌ててハンドルを切る後続車。対向車線では左折しようとしているトラック。ブレーキをかけたのは歩道よりを走る自転車。驚いて見上げるだけの老女性。サラリーマン。制服姿。ぼんやりとガラス越しに見るコンビニエンスストアの店員。排気ガスの匂い。
ストップモーションからスローモーションへの移行。
甲高い金属音とクラクションが耳にとびこんできた。あきらの足が歩道のアスファルトを蹴った。
「みっちゃん、あの子っ!」

拡散した感覚は、たった一点に向けて集中した。
このままバスが突き進んだとしたら、速度と角度と車体の傾き方からみちびきだされる到達点は……
「無茶するな、あきら！」
貢の声があきらの背をうった。あきらの目はまっすぐにひとつの対象だけをとらえていた。黒いランドセル。
ふりむいた少年の幼い顔だちと、大きく見開かれる二つの瞳。
歩道へころがりこんでくるバスと競い、あきらの影がその進路上にとびこむ。
そこまでの動きも時間としてはひどく短い、まばたきひとつで済んでしまう刹那の現象だったが。
「っ！」
意を決したように息をつめ、貢が片膝をついたことに、通行人の誰もが気づかなかった。彼の身をざわりと青の色が包んだことにも。
「ディレイ・ミンス！　ユーマの命だ！　あきらを守れ!!」
ぐあああん、と濁ったエンジン音。
そして——。

その場に居合わせた人間は皆、物体運動の法則をやや疑わずにはいられなかった。
突進して歩道へのりあげ横ざまに倒れて小学生一人と中学生一人を押し潰すはずだった大型バスは、直前で不意にバランスをとりもどした。
神技めいた素早さで少女が小学生をバスから遠ざける。それを確認するまでの時間、バスはよたよたと無意味によろめき、強引に減速したと思ったら、半分歩道にタイヤを乗せた状態でストンと停まってしまった。
破裂した前輪は、その時になってやっと思い出したように、もう一度破裂しなおした。ぐしゃりと形を失ったタイヤのまわりには、なぜか水溜まりが広がっていたのだが……。

「……やれやれ」
バス通りの見える裏道から、その顛末を見守っていた影がある。
事件の現場では、人々のざわめきをよそに、いよいよ遅刻の可能性濃厚となった貢があきらを無理やりひきずって走り去るところだった。
「出る幕はなし、だな。軽くケリがついてよかった」
呟いたのは黒髪の青年。外していた眼鏡をかけなおすと、硬質な印象は消え、穏やかな空気

がそれにとってかわる。……その姿は、普段の来生衛そのものだった。

「本当に、ケリがついたと思うのか？」

もうひとつの影が傍らに現れ、ぽつりとそう尋ねた。

「見てのとおりさ。貢がうまくあの場をまとめてくれたしね……おかげでこちらは手を出す隙もなしだ」

こだわりのない様子で、衛はお手あげというふうに両手をひらいてみせる。

来生閃は、そんな彼の横顔に目を向けた。金の混ざった褐色の髪がさらりと流れた。

「……ライア。あれは事故じゃない。あのタイヤは人為的に破壊された。……おまえが気づかないはずはない」

雄弁ではないがそのぶん真摯な言葉を、衛は黙ったまま受けとめた。

「おまえが何を考えているのか、俺にはいつもわからない……」

目を伏せて、閃はそれだけ言い足した。

自分の感情というものを表現すること自体が、彼にとっては苦痛な作業であるため、それ以上の言葉は語られなかった。

「……イオが気に病むようなことは、別に何もないさ」

ゆっくりとかぶりを振りながら、来生衛はいつも通りの口調で告げた。そして安心させるよ

うに閃の肩をたたき、先に立って家へと戻りはじめる。
その後ろ姿から目をそらし、彼は深い思索の内に沈みこんだ。
――来生閃として、また〈風使(かぜつかい)〉イオの名を持つ者として。

II

あきらには、十歳の頃より昔の記憶がない。
両親とともに事故に巻きこまれ、重傷を負いつつもあきらだけはなんとか命をとりとめたのだと、兄たちからは聞いている。そのときのショックで記憶を失ったのだろう、とも。
遠縁にあたる来生芳秋氏は、その数年前に妻子を亡くし、それをきっかけに医者も廃業して道楽(どうらく)まがいの売れない喫茶店を経営している人物だった。十五歳の長男を筆頭(ひっとう)に兄妹四人、行き場をなくしてバラバラになりそうなところを、全員まとめてひきとって養子としたのも、本人としてはほとんど道楽の域だったらしい。
……おそらくそれは『親父様』独特の照れかくしだ、とあきらは思っている。一度に子供を四人もひきとるとなったら、相当な決意が必要なはずである。
ハンパな気持ちで、四年間も『家族』なんかやってこられるわけがない。

「えーちゃんてばっ！　待ちあわせ三時って言ったよっ！」
中庭の土をスニーカーで蹴散らしつつ校門前まで突っ走ってきたと思ったら、たどりつくなりあきらは衛の片腕に力一杯しがみついた。ほとんど体当たりである。
「こらこら、この弾丸娘……」
ミサイルじゃないんだから、とぼやきながら、バランスをとりもどして衛は苦笑する。
「俺のコートを袖なしにするのはやめてほしいんだけどな、お姫様」
「ひっどーいっ、あきら怪力じゃないよ、そこまで！」
「素養は充分じゃないか」
「ひどいひどいひどぉぉい」
むくれるあきらにクスクスと笑って、彼女の肩に腕をまわし、衛は青鳳学園中等部の正門から離れはじめた。下校時間の真っ最中にこんな所でじゃれあっていたら、あきらのクラスメートたちからは何と思われることやら。——もっとも、衛自身は人の目を気にして行動を自重するような質ではないのだが。
「だからね、えーちゃん！　待ちあわせ、三時の約束だったでしょ？」
「三時頃の約束だよ」



さりげなくあきらのナップザックをひきうけて自分の肩にかけ、しれっとして衛は答える。
「だけどっ！　二時半までホームルームで、それから掃除当番があるって、知ってるくせして……えーちゃん二時にはもう正門前に立ってたでしょ!?」
「何か迷惑だった？」
「迷惑じゃないっ！　迷惑じゃないけど、五時間目の途中くらいから、クラスの女の子とか騒いじゃって大変だったんだもん。えーちゃんカッコいいから！」
「……それは……あやしげなお兄さんが女子中学生を漁りにきたかと思われてたりしたら嫌だなあ……」
わざと深刻に悩んでみせる兄の背中を、ばんばんとあきらは叩いてやった。
「えーちゃん全然あやしく見えない。元生徒会長くらいにしか見えないから大丈夫」
「うんうん、俺はあきら以外の女の子に目移りなんかしないから大丈夫だよ」
「――自分の妹にそんなこと言ってて何が大丈夫って!?」
「だって本当にあきらが一番かわいい」
真顔で断言するからこの男は怖い。
あきらは呆れたように顔をしかめ、それから気をとりなおして衛のロングコートに頬を押しあてた。

「あきらも兄ちゃんたち一番好きだな。父っちゃんとおんなじくらい好き」
「野郎どもと同列でも嬉しいよ、姫君。天にも昇る心地だ」
「えーちゃんって、ほんと性格ゆがんでる……。ねえねえ、えーちゃんのコートってば、あったかそうだね」
「入る？」
衛が広げたコートの中にすっぽり収まって、くすぐったそうにあきらが笑う。今日学校でおこった些細な事件の報告を、ひとつひとつ自分のことのように聞きながら、衛はゆっくりと足を運んだ。
そうして歩いてゆく二人の姿は、傍目にはとても兄妹と思えないものだったらしく、通行人からは羨望やら憧憬やら複雑な視線が投げられたが、そんなことはもとより衛の関知するところではない。
「……あきら」
「え？」
「今日みたいにクラブがないとか……高等部と時間が合わなくて貢と一緒に帰れないときは、必ず先に言っておくんだよ。俺か閃がお迎えにあがることにするから」
言い聞かせた衛の態度はやわらかかったが、瞳は笑っていなかった。あきらが怪訝な顔をす

る。

「なんで？　えーちゃん、午後があくのは水曜日だけでしょう？　せんちゃんだってお店のほう忙しいだろうし。平気だよ、あきら一人でも」

「駄目。放っておくと、あきらはいつバスの真ん前にとびだすかわからない」

「なっ……なあに、それっ!?　ひっどいなー、わかった、またみっちゃんがバラしたんでしょ、今朝のこと！　いつどこで情報が伝わってるか知れたもんじゃないんだから、もー」

「心当たりがある以上、あきらのほうが不利だね」

「だけどねえ……だけど！　あれはちゃんと間にあうタイミングだったの、みっちゃんが助けてくれなくても！　みっちゃんのおかげでバスに乗ってた皆さんはすごく助かったと思うけど！」

「そうそう、バスに乗ってる皆さんのためにも、あきらは一人にしておけないのさ」

あきらの必死な言い訳に対し、衛の一言は大いなる効果をもって作用した。他人様の安全を盾にとられたら、あきらとしても口をつぐむしかない。

なにせあきらは厄介事を見つけると自分から突っこんでいくタイプで、しかもその瞬間ひとつのことしか目に入っていない。災害を防ぐと同時に二次災害を発生させかねない、後先かえりみない勢いがありすぎるのだ。

無茶をしても怪我をしないだけの自信ならあきらにもあるが、そのとき周囲の状況すべてに対するフォローまではできないし、無茶したあげくに別の誰かを巻きこむということもあり得るわけで……。

兄たちと一緒にいると、そんな時に、背後を完全に守ってもらえるという安心感がある。それは確かだ。

なぜなら。

なぜならば、三人の兄は昔から、それぞれ性質の異なる『力』を——不思議な能力を——操ることができるのだから。

特殊な力。

貢は水を、閃は風を、そして衛は光を——その意志の下に従えて。

それが、本やテレビなどで話題になる『超能力』と同じ類のものなのか、あきらは知らない。

あきらにだけは、その力がない。生まれつきなのだろう。

能力があればあったでそれを他人に知られないための努力が必要となるし、三人がそのこと

で苦労しているのはあきらにもわかる。だから、うらやましいとは言わない。ただ、人の役に立つ、という次元で考えると、あきらよりも兄たちのほうが格段上なのは間違いない。少しだけくやしい。

「わかった。心配のあまりえーちゃんがハゲちゃったりしたら困るし」

「その心意気や良し、とでも言おうか？」

不吉な例えを出されて、兄の返答はやや複雑なものになる。

「でもやっぱり、あきらの行動、信用してないなー。過保護だなー」

ぶつぶつとあきらが口の中でごねていると、衛はあっさり首を横に振った。

「違うな、あきら、こういうのは過保護といわない」

「じゃあ何なの」

「当然のことながら」

もったいぶって、衛は前置きをする。それから、声をひそめた。

「愛、だよ」

Ⅲ

その頃、喫茶店『海』のカウンターで、来生閃は女性客の観賞物と化していた。

窓の少ない、どちらかといえば地味な造りの店である。木目をいかしたカウンターとアンティークなイメージの内装。カウンターは十席、テーブルが大小あわせて八つ。こぢんまりとしているが、マスターひとりできりまわしていた頃に比べれば、これでも大きくなっている。増築と改装の成果だ。

マスターには妙な主義がある。コーヒーの注文しか受けないのである。

かつては頑固にコーヒー豆の種類だけをメニューに並べ、ちゃらちゃらしたケーキなんかありません、紅茶の葉などストックしてございません、という態度に徹していたものだった。客のほうも、いわゆる玄人、コーヒー通がちらほら訪れるくらいで、今のようなにぎわいは望むべくもなかった。

それではいくらなんでも『喫茶店』の看板が泣くのではないか、と来生衛がメニューの改訂を進言し、来生貢が内装のコーディネートに手を加え、来生閃がカウンターの内に立つようになってからというもの、店の売り上げは大幅に変化した。二年半ほど前のことである。

しかし現在も、マスターの仕事はひたすらサイフォンをさばくことだけに限られる。逆の表現をするなら、コーヒーをいれるのは神聖にして侵すべからざる作業であるため、マスター以外の人間がその聖域に踏みこむことは許されないのだ。

理屈はどうあれ、結果として、残りの作業はほとんど閃の担当となっている。午前中は衛が、夕方からは貢とあきらが合流するのだが……。

貢とあきらには学校があるし、衛は週に四日、経営と調理を学ぶため夜間の講習へ出かける。その手の『趣味』が、来生閃にはまったくない。彼らのように、将来のために何かを勉強しようなどという気持ちは。

何も考えず、空でも眺めているのが一番いい。疲れない、自然な生き方ができればいい。

こんなことを口にすると——いや、生活として体現していると、あまりにも後ろ向きだと貢が叱る。

叱られるということは、相手との接点があるということだ。だから、閃にとってそれは苦痛にはならない。

「あのぉ……」

カウンターにへばりついていた女子大生が、おそるおそる閃に呼びかけた。とたんに、ギッ、と店内の数カ所から、同類たちの厳しい視線が飛ぶ。ぬけがけは許されない空気である。

二十秒ばかり沈黙が流れたのちに、ようやく閃がゆらりと目を上げた。
「？　……何か」
物憂げな美貌が問いかえし、女性客たちはこそこそと「ああ動いたわ」「喋ったわよ、今」などと囁きあった。話題の的となっている本人のほうは、店内の動向にまるきり気づかずぼんやりしている。そこがいい、との声すらあるのだから世のなか因果なものである。
「ダージリンをもう一杯、お願いしたいんですけど」
「……ダージリン……」
ということはマスターは動かない。ちらりと閃は店主を見やったが、来生芳秋氏はどっしりと椅子にはまりこんでヘミングウェイに没頭していた。
仕方なく、閃は新しい銀のティーポットへ手をのばす。
チリン、とドアについた鈴が鳴ったのはその時だった。
作業の途中で手を止めた閃は、あくまで普段のペースで視線を動かした。
が、ふりむいて相手を認めた瞬間、彼はわずかに眉をひそめていた。誰の目にも気取られぬほど、ひそかに。
黒いランドセルを背負ったまま入ってきた新客は、背伸びしながらカウンターの席に腰かけ

た。

小学生。学校帰りか。

こんな目立たない店に、親も連れずに。それは少し妙なことと言える。

だが店にとっては、どんな相手だろうと客は客だ。

「こんにちは！」

少年は、閃と目を合わせるなり、そう切り出した。

「ぼく、南小学校六年一組の葉月奏太といいます。——あきらさん、いますか？」

はきはきした喋り方。

大きい、澄んだ瞳で、まっすぐに見上げてくる。

「……まだ……」

お冷やのグラスを差し出しながら、閃はそれだけ答えた。

この少年を、閃は知っていた。今朝、あきらがバスから救ったはずの小学生だ。あの時は言葉を交わす間もなくあきらたちは走り去ったのだから……この奏太という少年は、どうやって喫茶店『海』の場所を知りあてたのか。

「そうか、そうですよね、まだ学校ですよね。じゃあ、これ、あきらさんに渡しておいてください」

ズボンのポケットから、奏太は青い表紙の手帳をとりだした。
青鳳の校章が入っている。……あきらの生徒手帳だ。
「あきらさん、これを落としていかれたんです。あ、ぼく、今日の朝あきらさんに助けてもらったんです。お礼言ってたって、伝えてもらえますか？」
「……ああ」
手帳を受けとりながら、閃は低く声を押し出す。
「こちらこそ……ありがとう」
しかし言葉とは裏腹に、閃の内部では違和感が広がっていた。
あの時の一部始終を目撃されていたことを、この少年は知らないだろう。そして自分の見ていたかぎり、あきらは生徒手帳を落としてなどいない。
ここの住所は、確かに手帳の内に記されている。それを知るためだろうか？　あるいは別に意図があるのか？　目的はわからない。が。
この少年は――あきらの荷物から生徒手帳を抜き取っている。それもあの緊迫した一瞬に。
警戒のサイン。
ただ、あまりにも朗らかで礼儀正しい小学生としての、奏太の印象が、疑念にブレーキをかける。相手は子供だ。いかにも純粋な。

「いいお店ですね。ぼくケーキ食べていこうかな。パフェがあるんですか。じゃあぼくチョコパフェにしよう」

「……いいよ。手帳の礼だ。俺のおごりにする」

閃が二言以上のつながった台詞を吐き、さらに微笑めいた表情さえかいまみせたため、店内の女たちからは一斉に感嘆のため息が漏れた。すでにダージリンは忘れ去られている。

昔から、子供と動物に対しては甘くなってしまう面が、この次男にはある。ヘミングウェイの文章から意識をはずし、来生芳秋はその様子を見守った。

閃がガードを解くのは、決して悪いことではない。

だが奏太少年は、どこか子供らしくない子供に見えて、それが来生芳秋にとっては少し気になる部分だった。

賢しいのではないかな、と。

にこやかな笑顔の裏に、大人よりも冷めた精神があるようで、率直なところ、あまり好きになれなかったのだ……。

あきらさんって素敵ですよね、早く帰ってこないかなあ、などと無邪気に言いながら、奏太はチョコレートパフェを五分でたいらげた。

「ごちそうさま。おいしかったです」

すとん、と椅子からとびおりて、奏太はランドセルを背負いなおした。
空になったグラスへ閃が手をのばす。
「さすがですね」
ちょうど閃との距離が最も縮まった瞬間を狙うように、奏太がもう一言つけたした。
空虚な声だった。
表情というものがない、感情も体温もない、がらんとした空洞を思わせる響きだった。得体の知れぬ冷気に触れて、閃は思わず顔を上げていた。
奏太が微笑する。
「さすがだね。――〈風使〉のイオ」
それを聞いたのは、店内で来生閃ひとりきりだった。
店にいた女性客たちも、マスターである来生芳秋も、いやに礼儀正しい小学生がぺこりと頭を下げて出ていくのを、至極当然のこととして、別にわざわざ見送りもしなかった。
チリン、とドアの鈴が鳴った。
「……」
閃はしばらく動かなかった。凍りついた像のように。
普段の彼の沈黙とは、本質的に異なる――痺れにも似た緊張感。

「……どうした？」

さすがに気づいて、来生芳秋が呼びかけた。

その声が契機となった。

はじかれるように閃が動いた。カウンターに片手をつき、勢いよく跳びこす。客の悲鳴。ざわめきをかえりみもせず彼は出口へと走った。ガラス戸を押しあけて外に駆け出し——。

けやき並木の散歩道が店の前を横切る。左右へ目を走らせてもすでにあの少年の姿はない。

閃は指を鳴らし、彼の使鍵に尋ねる。ディレイ・ザード。風を統べるもの。

「奴の行方を」

さらりと風が吹く。

「東か？」

導きに沿って彼は方向を転じる。が、数歩も走らぬうちに、彼はその足を止められた。

背後に……風を阻む闇がある。

暗黒の冷気。

動くわけにいかない。ふりむいた瞬間に隙を作ることになる。そして背後をとった相手が誰であるのか、ふりむかなくても風使イオは知っていた。

「やはり貴様か……」

返答はない。押し殺した笑い声。——子供の声。
イオの瞳が輝く。金褐色に。ディレイ・ザードが風を響かせる。
そして彼は仇敵の名を口にした。すべての元凶である、その男の名を。
「礼神官……アスヴァル……！」

Ⅳ

あきらのために参考書を選ぶことにして駅前の本屋へ遠まわりし、ついでにあきらにせがまれてハードロックのCDを買いこむのにつきあい、なりゆき上あきらにダブルコーンのアイスクリームをおごった後に、ようやく来生衛が家へたどりついた頃には、来生貢のほうが先に帰って、すでに夕飯の製作にかかっていた。
「みっちゃん、ごめーん！　遅くなっちゃった！」
「この不良娘、いつまでデートしてんの！　さっさと手洗ってうがいしておいで！」
いつも通りに声をかけあきらを洗面所へ追いやっておいて、貢は素早く衛に近づいた。
厳しい表情で囁く。
「イオが帰ってこない……」

コートを脱ぎかけていた手を止め、衛も眉をひそめた。
「急に店を飛びだしてそれきりだと親父様が言っている」
「それだけか？」
「わからない。ただ、その前にこれを返しに来た子供がいる。今朝の子だ」
青い手帳。
その材料から導きだされるのは、疑惑だ。それは三時間前に閃の抱いた疑念と、まったく同じものだった。
「……わかった、俺が行く」
脱ぎかけたコートを再び身にまとい、衛は呟いた。
「放っておけない……確かに風が騒いでいる」

自分が捜索に出るほうがいい、と貢は言ったが、その案を衛は却下した。夕飯の前だというのに『台所の神様』である貢が家をあけたら、いやでもあきらに異変をさとられる。彼女を心配させることだけは、絶対に避けなければならないのだ。
すべて自分たちの手で防ぐ。何が起ころうと。彼女に苦しみを近づけさせはしない。指一本さえ届かせはしない。

たとえ過去からの使者が現れようと、異界からの魔手が伸びようと、決して。
夜風にコートをひるがえし、彼は眼鏡を外した。なにもかもをその眼差しで貫くように。

「あきら、もうすぐ御飯にするから、それまでお店のほう手伝っておいで！」
衛が出かけた直後に、貢はそう叫んで、確かに「はあい」とあきらの返事を聞いたはずだった。
そうしてあきらを安全な——少なくとも人目はある——場所に送りこみ、自分はエプロンをかなぐり捨てて水道の蛇口をひねる。
「ディレイ・ミンス……」
水流へ指をのばし、貢は命じた。優しげな姿に似合わない、芯の通った声で。
「ミンスよ、界を超え〈水使〉ユーマが命ずる。地の浄化、円陣の顕し、聖水をもって戒めとなす。我らが主上メサイエ・エクサール・レアの名を誓約の証とせん。今、行きて……ああ舌がもつれるな、ちゃんとお役目果たしておくれよってねー」
さあっと一筋の水が床を走り、窓の隙間から外に消えた。
やがて命をうけた聖水はこの家を囲んで円陣を描き、仇なす者の侵入があれば知らせてくれるだろう。簡易結界のできあがりだ。

「さて……と」

ふりむきかけて。

舌打ちをひとつ。

さっそくのお客様か。何者かの来訪を使鍵(しけん)が伝え、貢は裏口(うらぐち)へまわってドアの陰に身を潜(ひそ)めた。

が、気配をさぐってみると……。

自分の誤りを、貢は知ることになった。そこに敵意はなかった。

伝わってくるのは……よく知っている……在気(エイダ)。

「何だって……？」

独白と同時に、彼はドアを押しあけた。庭の向こうには小さな林が広がり、まるで庭が延長されているように見える。

その林から、柵(さく)を乗りこえて、そして庭へ倒れこんだのは。

「――イ、オ、か!?」

「……」

影は何か答えたが、貢の耳までは届かなかった。駆け寄ってその身を抱きおこし、その時になって貢は閃(ひらめ)の全身が細かい傷で覆われていることを認めた。



「なっ……何があったんだ!?　イオ、話せるか!?」
「あきらは……!?」
ぐいと片腕をついて顔を上げ、閃はかすれた声で問いかけた。
「あきらはどこにいる!?」
「どうしたんだ、あきらなら今、店に――」
言いかけて、貢は言葉を切った。
あきらはいるだろうか、本当に？　在気（エイダ）は……彼女の伝える力は。
「奴が来ている……」
貢の迷いには気づかず、荒い呼吸とともに閃が告げた。
「この世界へ……奴も、たどりついて……」

人のことを見くびらないでほしい、とあきらは思う。
衛と貢がこそこそと何か話しあって、そして閃の姿が見えない。三人の兄は、あきらの知らない、だがずいぶんと重大な局面に突き当たったようだった。そんなことは顔色ひとつで、いや家を出てゆく衛の足音ひとつであきらにはわかる。
貢の言いつけには、こっそり心の中で頭を下げつつ適当に答えておいて、スニーカー片手に

あきらは窓から外へ出た。
けやき並木まで出て、あらためて家にむかって両手を合わせる。
「みっちゃん、ごめんっ！」
それから、あきらは全速力で走りだした。
閃に何かあって、そして衛がそれを追ったなら、自分は衛を追いかければ問題の『何か』にたどりつける。あきらはそう判断した。先行した衛の居場所を知るのは困難なことなのかもしれなかったが……なぜかあきらには、衛の通った道がはっきり見えるような気がしたのだ。
十五分くらい、ひたすら走りつづける。道は、どんどん人気のない方へと進んでいった。駅前の商店街から幹線道路を渡り、住宅街もぬけて、雑草の茂る空き地の広がるところまで……。
川沿いの土手。
橋の手前で、あきらは立ち止まった。土手のすぐ下には練習用の野球グラウンドがあるが、今はライトもついていない。
怖い、という気持ちはない。
女の子としての自覚がないんだ、と貢には叱られそうだ。暗い所の一人歩きが怖くないなんて。けれどケンカにも逃げ足にも自信があるし、それに。

自分ハモット怖イコトヲ知ッテイル。ズット恐ロシイコトヲ。スベテヲ失ウコト。世界ノスベテガ消エテシマウコトヲ。

「あれ？」

軽く自分の頭を叩いて、あきらは首をかしげた。

何を考えていたんだっけ？

ふわっと空白になってしまう瞬間が、ときどきある。目をさましたとたんに忘れてしまう夢のように。

「事故の後遺症かなあ……」

まあいいか、とあきらはこだわらずに片付ける。目の前のことのほうが大切だ。

この近くにいるはず……。

「……あきら!?」

薄暗闇のむこうから、驚愕を隠せぬ声がかかった。

「えーちゃんっ！」

間違いなかった。ぱっと笑顔になってあきらは叫んだ。

「本当にあきらなのか!?」

多少まわりが暗かろうが、衛にはあきらの姿が見えるはずだった。だからその言葉は確認で

はない。彼は信じたくないだけだ。
キュッとあきらは唇を噛みしめた。これから衛が何を言うか想像がついたからである。
「この馬鹿!!」
案の定、あきらの肩を両手でつかむなり、彼は正面から怒鳴りつけてきた。
「どうしてこんな所にいる!? なんでついてきたんだ、許さないぞ、あきら!!」
「許す許さないって、フェアじゃないよ、えーちゃん!」
まったくたじろがずにあきらが言い返す。
「えーちゃん隠し事してるじゃないか! 兄ちゃんたちみんな、あきらに隠し事してるじゃないか! ホントのこと言わないで、ついてくるなとも言わなかったから、だからあきらついてきたよ、何が悪い!?」
「……この強情娘」
痛いところを突かれたように、衛は一言だけ呟いて黙りこんだ。
珍しく彼は眼鏡を外している。言葉巧みにかわすこともせず、ただ感情だけで叱りつけたのも——いつもの彼らしくない行動だった。それは滅多に見せない、彼の素顔の部分だ。
「まいったな……」
吐息まじりに、衛は前髪をかきあげた。

「……あきらに怒鳴ってしまった。あきらのせいだぞ。人の気も知らないで」
「ごめん。でも、えーちゃんのせいだよ」
「馬鹿、あきらだよ。……やめた、不毛だ」
「やだな、そこでやめたら結局あきらのせいになるんじゃん」
「うん、だってあきらのせいだからね」
「……えーちゃんって、やっぱり性格まがってる」
なんとでもお言い、と声が返る。衛はなんとかペースを取り戻したらしく、もう一度だけため息をついて、そして表情を改めた。
「隠し事、か？　……あきら」
「……うん」
こっくりとあきらが頷く。
「せんちゃんに何かあったんでしょう。でも、それはせんちゃん一人のことじゃなくてあきらに関係あるね。でなきゃ兄ちゃんたちがあきらに隠すことないんだ。そうでしょ？」
混じり気のない、真実を摑む二つの瞳。
「……あきらの目は罪人を殺すな」
「え？」

「正視できずに、ピサの斜塔から飛びおりたくなるのさ」
ひとりごとのように呟いて、衛はクスッと笑う。あきらにはよくわからなかった。
「えーちゃん、話の本題は？」
「ああ……続きはお家でね、お姫様」
「なんでっ!?」
衛は周囲の闇に視線を投げた。
「閃の気配を追ってここまで来たんだけど、実はここから先の気配が見えない……この周辺にもいない」
衛の瞳は、わずかな光さえあれば、どんな場所であっても細部まで見ぬく力を持っている。普段は眼鏡をかけて抑えているのだが……。
「行き違いになったか……それとも俺が気配を読み違えたか……とにかくこれ以上ここにいるのは無意味だ。まさかあきらが来るとも思わなかったしね。一度、戻ってから対策を考えよう。今度はあきらを仲間はずれにはしないから」
閃が無事でいるかどうかについては、衛はわざと触れずにいた。
本当は、あきらさえ現れなければ、このまま人気のない場所を歩きつづけて自ら囮となり、問題の敵が手を出してくるのを待つ、という方法も考えてあったのだ。

あの少年。
閃を挑発して。その目的は一体……。
「それで、せんちゃん大丈夫なの？」
あきらが尋ねる。かわそうと思うと、これだ。
当然、と答えかけて、衛はハッとふりむいた。
「大丈夫だって？　大丈夫なものか」
闇の内から、邪気のない声が響いた。
ぞくりと冷たい。虚無の冷ややかさ。
すかさず衛があきらを背後にかばう。あきらはその目を瞠り、現れた影を見つめた。
小柄な影。まだあどけなさすら残る顔立ちで。
「しかし私はね、君に会うためにここへ来た。他の連中はどうでもいい。君のためにここまで来たんだよ。――メサイエ・エクサール・レア」
そう告げたのは少年……葉月奏太。しかしその言葉は決して、十二歳の子供が語るものではなかった……。

第二章　エクサールの守護者

Ⅰ

何が起こっているのだろう？

「下がっておいで、あきら」

衛の背中がそう告げた。あきらは慌てて首を横に振った。

「やだ！」

冗談ではない。

あきらの気持ちは奏太の一言だけに向いていた。目の前にいる少年の素性やそこに漂う剣呑な空気などは二の次として。

この子は何かした。閃に何か。自分の兄に——何かよくないこと。

「なにが大丈夫じゃないって!?」

「あきら！」

衛が制止する。かまわずあきらは声をはりあげた。
「せんちゃんに何かしたね!?　どういうことなの、お芝居みたいなこと言ってないでちゃんと説明しなさい！」
「――おやおや」
ひどく大人びた仕草で、奏太少年は肩をすくめた。
「激しい気性だけは昔のままというわけだね……。レアという名は月狼の象徴だね、もう忘れてしまったかい？　君の記憶が封じられているのは計算外だったよ。誰の仕業だろうね？……案外、そこにいる君のお守り役かもしれないね」
「あきらの質問に答えてない！」
何を言っているのだろう、この少年は？
はっきりいって関係なかった。今のあきらにとっては。
自分にとって大切な人間に危害を与えるものはすべて敵。たとえ相手が子供であろうと。姿かたちに惑わされはしない。結果がすべて――犯した罪がすべてだ。
「自分だけでわかって話を進めるのは無礼だよ、そちらの名前もこっちは知らない！　礼を守らない相手に、こっちだって払う義理はないね！」
「驚いたな」

奏太はちらりと衛のほうを見やった。
「ここまで真っ白だと、逆に強みとなる。とても強靭な精神の持ち主だ、彼女は。君などは、それが羨ましいのではないかい？　……光使ライア」
「貴様の無駄口につきあうつもりはない」
硬い声で衛が答えた。あきらの内に、少しだけ驚きが生まれた。
兄がこの相手を知っていること。兄が別の名で呼ばれたこと。
そして、衛は今、抑えても抑えきれない激しきった感情を抱えて少年と対峙していた。……それは憎悪？
「何故、貴様が生きている……？」
ざわざわと風が衛の全身をなぶった。
殺意、がそこには確かに存在した。
あきらは思わず背後から兄の片腕をつかんでいた。彼の身はわずかに震えているようだった。仰ぎ見た横顔に笑みを見出したような気がしてあきらは寒気を覚えた。
「えーちゃん！　えーちゃん、えーちゃんてば！」
それは微笑ではない。あまりに激しすぎる思いが、それ以外の表情を招き得なかったのだ。
「だ……駄目っ……だよ……！」

衛が変わってしまう？　変わってしまう!?　何かが――何かとても危険なことがおきる。自分の知らないところで因果律が狂っていくのを、ただ見過ごすわけにはいかなかった。

「理由など必要かい？」

ゆったりと尋ねて、少年は腕を組んだ。

ひどい違和感。この少年は『子供』ではない。歪んだ精神。それは歳月の形成するもの。

「生き恥をさらしたのは、君とて同様だろうに……ライア。君はたしかディシスの――」

「殺したのは貴様だろう!!」

たったひとつの名が銃爪となった。突き刺すようにライアが叫び、そしてあきらの目の前で……

変貌がおこった。

騒いでいた空気が一瞬、竜巻となって彼を包みこんだ。風ではなかった。生気の放散？　優しい熱があきらを正面から襲い、ふわりと通りすぎていった。

あきらの指が、彼の腕から離れた。自然に。

……誰？

見たこともない……もうひとりの『衛』がそこにいた。

黄金の髪、琥珀の瞳。そして隙のない、鍛えぬかれた戦士としての張りつめた横顔。

あきらは知らなかった。彼がかつてここではない別の世界で光の使鍵を授けられた、最も優れた『守護者』であったことを。

「……礼神官アスヴァル」

決意に満ちた眼差しが、少年の姿をとった仇敵をとらえた。

くらり、と一瞬の幻覚。

あきらの目の前に一面の大地が広がった。

その大地は平らではなく、ボールの内側をのぞきこんだように曲面としてあきらにはとらえられた。あきらはどこか高い所からそれを見おろしている。雲や青空はすぐ近くにある。

誰かが一緒にそこから下界を見つめていた。美しい草原を。清らかな湖を。

『……ねえ？』

ふりむいて、その人は自分に話しかけてくる。

『……』

名を呼ばれる。でも聞こえない。

あきらに向かって言っている？　あなたは誰？

そう尋ねると、相手はおかしそうににっこりと笑った。——それは鏡だった。

『私はあきらよ、お馬鹿さん』

「やるのかい？」

少年が尋ねた。

「君といい風使の坊やといい、短気でいけないな」

「ディレイ・ルナク！」

かまわずライアは彼の使鍵を呼び出した。

「清月の光、あるものは檻、あるものは刃へ！　因果力の解放、約定の導きを告げよ！　アスヴァル!!　貴様をこの世界から抹殺する!!」

「駄目えええっ！」

はっと我に返って、はじかれるようにあきらは叫んでいた。

「駄目だよっ!!　そういう風にやっちゃいけないっ!!」

月光が地上へと降りてきた。矢のように夜をつらぬいて。

光が渦となる。高速で凝縮する光のかたまりがライアの命ずるまま走り、少年をめがけて襲

いかかった。

「殺してやる!!」

あきらの声は届かなかった。憎悪と怨念だけが彼にそう叫ばせた。

神官アスヴァル。もっとも深き罪を犯した男。

月光は最強の僕だった。使鍵ルナクの導きをうけ、清月の光は敵を束縛する檻と化し、灼きざむ刃と化し、磁界を狂わせ分子結合を崩し、ついにはその身を根底より消し去ってしまうだろう。

殺すことに迷いは感じなかった。——この男はそれだけの事をした！

「衛ちゃ……」

あきらは腕で両目を覆った。凄まじい量の光が目の前で爆発した。

避けもせず、奏太少年はそれを正面から受けとめた。

真っ白な嵐が少年を包んだ。彼を呑みこみ、そして二度と解放しないだろう。激情に走った光使ライアには、そう思えても無理はなかった……。

「——!?」

半秒後、ライアがハッとその目を瞠った。

ようやく状況を悟ったときには、対処のしようがなかった。唯一、背後にいるあきらへの被

害を防ぐ以外には。

次の瞬間、すべての力がライアに向けてはねかえされていた！

あきらが悲鳴を呑みこんだ。肩と胸に深い傷を負い、ライアはその場に片膝をついた。ディレイ・ルナクが光の暴走を食いとめなければ、即死しているところだ。

少年は無傷でそこに立っていた。何事もなかったようだった。

「あきら……」

激痛をふりはらい、ライア――衛が無理やり立ちあがる。

「ここから逃げろ……早く行け！」

「やだ！」

「あきら、言うことを聞くんだ」

「いやだっ!!」

頑(がん)としてあきらは抵抗した。

何故、こんなことにならなければいけないのか。何もわからないまま二人を置いて去れるわけがない！

ライア？　アスヴァル？　……ディシスって誰？

初めて聞く名前ばかり。なのに……。



「アスヴァルっていったね？」

何のためらいもなくその名を口にしている自分がいた。するりと舌にのる発音は、遠く慣れ親しんだ響き。

「……あきら！」

振りかえるライアの表情も、あきらのよく知っている兄のものだ。容姿が少し変わっただけ。同じだ。わかる。認められる。

「君のほうが理性的なようだ」

少年――アスヴァルがそう評した。

「そんなことないよ、あきら今すごく怒ってる」

髪を一振りし、あきらはまっすぐにアスヴァルを見据えた。

「だけどわかんないこと沢山ありすぎて怒るに怒れない。だからはっきりさせる。……アスヴァル、あなたどうして、何が目的であきらの所に来た？」

「……目的？」

少年は無邪気にクスッと笑う。

「嬉しいことを訊いてくれるものだ。そう、目的はあるよ。……レア、私は君を、君の故郷へ還す手伝いをしたいだけなんだがね」

故郷？

あきらが問い返そうとした時、そしてライアが何か言いかけた時、アスヴァルは上着の内側から一本の……短刀、をとりだした。

ライアの呼吸が止まる。

それは黄金色の短刀。端整な装飾に覆われた鞘に、今は収められているが——。

じりっとあきらの内で何かが焦げた。

熱い。指の先が熱い。引き寄せられている？　電磁石のように。

あの短刀に。

「ガース……」

すぐ隣で、ライアがそう呟いた。瞬間、あきらの胸にその言葉、その名称が痛いほど、苦しいほど鮮明にとびこんできた。ガース。ガース……司杖。

あたしの半身。

我ガ力ヲ支エルモノ。黄金ニ輝ク聖光石。祝福ノ聖光石。司杖。

「……それは」

かすれた声で、ライアが尋ねた。

「それはディシスのものか……？」

「さあ？」

少年は肩をすくめ、返答を拒む。

「しかし彼女の役に立つことは確かだ」

「貴様……何を考えている？」

「エクサールとガースが揃えば、なすべき事はひとつだ。界境の扉をひらき、我らの故郷へ道をつなぐ……君にとっても悪い話ではあるまい」

ライアが絶句した。

あきらにはアスヴァルの言うこともライアの思いも、どちらも不可解だった。自分の知らない話。見えない世界。

けれど……あの短刀には惹かれる。鼓動が速まって止まらない。司杖？　ガースという名なのだろうか。

「……貴様の言うことは夢物語だ！」

吐き捨てるようにライアが言った。

「あのまま琅月界が無事であるはずがない……！　貴様自身の手で滅ぼしておきながら、今さらなにが故郷だ！　恥知らずにも程があろう、アスヴァル!!」

「方法はある！」

初めて、アスヴァルのほうも声を荒らげた。
「方法はあるのだ……！」
少年の面を暗い情熱がかすめ、すぐに消えた。
冷ややかな微笑が、それにとってかわる。
「しかし、君はやはり目障りだな。どうも、殺意に目のくらんだ人間とはまともな話ができないようだ。それに光使ライア、今そうしている君を見ると、私はディシスが哀れでならないんだよ……」
「――――」
ライアが眉をひそめる。蔑みをこめてアスヴァルは彼を見た。
「裏切者め」
その一語が、どのような意味をもってライアに突き刺さったのかあきらは知らない。すでに言葉はなかった。鋭い――苛烈な空気があきらに伝わった。伝わったときにはもう遅かった。
「ルナク、奴を殺せ!!」
「愚かだな、ライア！」
少年が嘲笑した。

司杖を持つ者に、使鍵の導きは通用しないのだ。放たれた力はすべて本人へ返る。承知のうえでアスヴァルは彼を挑発した。たとえその意図が知れていようと、その分だけ深く相手の傷を抉ってやればいい。そしてそれは成功した……。

Ⅱ

来生貢――〈水使〉ユーマは全速力で土手を駆けあがり、強大な白光が眼前で爆発するのを見た。轟音が大気を震わせた。

「ライア!!」

ざっ、と一筋の光がアスヴァルの頬をかすめた。片目を細めてそれをやりすごし、頬に走った傷から鮮血が散ったにもかかわらず、少年は満足げな笑みを浮かべていた。

その爆発を、あきらはまばたきもできず間近に見た。

白い白い別世界。

なにか大きな音があがったようだった。凄絶な風が吹いたようだった。

長い髪がザワッと後方へ流れたが、あきらは目を見開いたままだった。
「……あっ……」
語るべき言葉は、どこにもなかった。
意識を裏切って、声だけがひとり歩きする。
ゆったりと笑う少年の姿。視界に入るものはそれだけ。
「えーちゃ……」
知らず、あきらは手探りをしていた。
夜の闇のなか——。
すぐ一歩前に立っていたはずの、兄の姿は、完全に消滅していた。もう誰もそこにはいない。誰も見えない。
「あきら！」
背後で叫んだのは貢だ。来てくれた。追いついてくれた……。
だが振り返ることはできなかった。身体がまったく動かなかった。
衛……『ライア』。消えてしまった。一瞬のうちに目の前から消し去られてしまった。
ならば閃……『イオ』。彼もまた同じ運命をたどったに違いない。アスヴァルの不敵な態度。すでに自分の知らないところで決着はついてしまった。すべてが手遅れだった。もうどうにも

ならない。この少年が……

この少年がいるかぎり。

「あきら、こっちにおいで！　そいつから離れるんだ!!」

走りながら貢が呼びかけた。あきらの耳には届いたが、心までは届かなかった。

「今度は〈水使〉か」

ぽつりとアスヴァルが呟く。

その台詞はあきらの内側では、確信とともに拡大してとらえられた。

今度はユーマがやられる。

「無駄だ、水使ユーマ」

アスヴァルがそう告げた。

「彼女は私と共に来るしかないのだから」

「よく言う!!」

ユーマの瞳が紺碧の色をとりもどす。ひるがえる髪はウルトラマリンの青に染まり。

「ディレイ・ミンス！　煙幕！」

彼が命じると同時に、川の水面から深い霧が生まれた。ざわっと生き物のようにうごめいて、土手の上まで流れてくる。

「あきら！」
白い霧のベールを張りめぐらして、その隙にユーマはあきらの腕をつかんだ。
「奴は相手にしちゃいけないっ！　このまま逃げるんだ、ぼくがくいとめるからっ!!」
耳元で叫び声をたたきつけられて、あきらが振り返った。
驚いたような瞳で。
だがその瞳の奥に、ユーマは感情を見出せなかった。
氷や硝子（ガラス）と変わらない……。
「……あきら？」

「子供だましだ」
アスヴァルは肩をすくめ、手にした短刀を持ちあげた。
「水使ユーマ、こんな手品を披露（ひろう）したところで、私には君の姿がはっきり見える……」
霧がつらぬかれる。
司杖の輝きに撃（う）たれ、まるで畏（おそ）れるように霧は退却した。
押しのけられた白色（はくしょく）が大きく放散し、夜のなかに溶けていく。

霧が晴れ、黄金の短刀が目にとびこんできた、その瞬間。
「ガース！」
声のかぎりにあきらは叫んだ。
「ガース!!」
それは自分に属するもの。
自分の魂。勝手に操られるものではない。遠くで決められるものではない。
「許さない……!!」
全身から負のエネルギーが流出するのがわかる。負の感情。怒りや憎悪。
自分のまわりで勝手に出来事が動く。争いがある。命じる者と命じられる者。束縛。束縛。
封印の力。
自分自身の意志は置き去られて——。
なにもかもが許せない。起きることのすべてが不条理だった。絶対に認められない。だから叫んだ。理屈ではなく。
来生あきらの誇りにかけて。
「背天の罪！　ディア・レ・ノス・ク・エストワイア、狂月の宵に裁きをもたらさん！　ガース、汚されし王の杖!!」

凄まじく甲高い音がその場に鳴りわたった。

「あきら！」

ユーマが叫んだ。耳をふさがずにはいられない。神経に不快を与える高音。まるでハウリングをおこしたスピーカーの間近にいるようだ。

「ガースが……!?」

呟きは続かず、アスヴァルの面に苦痛の影が走った。

短刀を握る指先から全身へ、痺れとも痛みとも熱とも呼べぬ、なんとも名状しがたい艱苦が彼を襲った。腕が震え、思わずガースを取り落としそうになる。少年のあどけない顔に汗が流れる。彼は歯を食いしばり、身をかけめぐる苦しみに耐えて、なおもガースは手離さなかった。

「共、鳴、か……これが」

エクサールとガースの共鳴。ガースを侵害した者は罰されるのだ。想像を絶する、無比の苦しみをもって。

だが……。

「お仕置きをうけた程度では……投げ出せるものでは、ないのだよ」

少年は軽く笑ってみせた。大変な精神力の賜といえた。すでに全身の感覚を失調して、気絶していてもおかしくないのだ。

あきらは毅然と立ったまま、答えもしなかった。凄まじい音の嵐のなかにいて、表情ひとつ変えていない。

「……あきら！」

もう一度ユーマが必死に呼びかけた。ガースの放つ破滅的音響――それは磁界の悲鳴である。ガーズを持っているアスヴァル本人はもちろん、近くにいる者すべてが巻きこまれる。あきらはそれを知らないのだ。

ビシッ、バチッ、とガースから火花が散り、土手に生える雑草へはねてそれらを変色させた。――その一部分だけ、枯れてしまっている。

ユーマ自身も波動に影響されて、目眩がとまらない。もとより使鍵の通用する状況ではない。

「あきら！　あきら、聞いてくれってば!!」

駄目だ。ユーマは唇を噛んだ。あきらは今、自分の意識を離れてしまっていた。

止めようにも、あきら自身止められないのだ。

「アスヴァル！」

仕方なく、ユーマは相手を変えた。
「アスヴァル、ここより退け！　おまえのことを逃がしてやるのはシャクだけど、おまえだって自分がどんなにバカなことをやってるか承知しているはずだ！　ここを去り、そして二度と現れるな！　そうすればおまえのこともガースのことも忘れて、あきらは普通に生きていくことができるんだから！」
「……お優しいことだ。君らしいな」
アスヴァルが呟く。実際、これまでのアスヴァルの所業を不問に付してまであきらの平穏な生活を択るユーマは、究極の現実主義者と呼べるのかもしれない。
「だが聞けないな……私には時間がない」
「何だって？」
ユーマの問いにはアスヴァルは答えず、苦痛の元凶であるガースをあえて両手で握りなおした。
「私には彼女が必要だ。君を倒してでも手に入れる。――あるいは、君もレアとともに私と来るかい？」
「なっ……」
思わずユーマは絶句した。最後の一言はひどい侮辱だった。

「……守護師団（ライエイーツ）の一員にそれを言うわけか？」

「何故か君たちは、肝心（かんじん）な所ではまったく同じ反応になるんだな……」

アスヴァルの台詞が示すのは、先にアスヴァルの申し出を拒絶した二人――イオと、ライアだ。同じ手に乗せられそうになっている自分に、ユーマはかすかに舌打ちをする。

アルヴァルはこの場で手を引きそうになかった。どうする？

「あきら！」

ガースは鳴りやまない。あきらに自分の声は届かず、ユーマは少なからず追いつめられた――。

その時だった。

「アスヴァル」

不意に、アスヴァルの背後から発された声があった。

「往生際（おうじょうぎわ）が悪いのも、愚かとは呼べないのか？」

「！」

さすがに少年は虚（きょ）をつかれ、ふりかえった時には目の前に長剣の切っ先を臨（のぞ）むこととなった。ガースの与える苦痛と、相手を目にした驚愕（きょうがく）とで、その表情が一瞬歪む。

胸の傷からにじむ鮮血はそのままに、片腕で剣をかまえ、まっすぐに銀色の刃を少年へつき

つけているのは……

鋭利な琥珀の瞳をもつ、長身の若者。

それは光使ライア。そしてその影に従うようにひっそりと、風使イオがたたずんでいた。

Ⅲ

「なるほど……してやられたな」

率直に、アスヴァルはその現状を認めた。

ガースを持つ以上アスヴァルに対する攻撃はすべて無効となるが、今の共鳴現象が続くかぎりガースがアスヴァルの意志に応えて働くこともない。そしてこれだけ至近距離からライアが攻撃を仕掛けたら、相討ちになる可能性は非常に高かった。

「この場は預けるべきだ、アスヴァル」

低く声を抑え、ライアが言った。

感情の激流は、すでに影をひそめていた。アスヴァルの挑発にみすみす乗ってしまったのだから、我ながら情けない話だ。自滅する寸前にイオの使鍵ザードが強風をおこして介入し、光芒にまぎれてアスヴァルの前から引き離した……そのおかげで、自分はなんとかこの世から消

滅せずにすんでいる。

現在なすべきことは殺戮でも復讐でもなく、あきらの暴走を止めることだった。一刻も早く。

「同感だよ、ライア」

少年はかすかに吐息した。

「今度はもう少し上手に仕掛けるとしよう」

冗談めかしてそう告げると、唸りをあげるガースと共に、ふわりと空間を転移する。――アスヴァルの姿はその場から消失した。

礼神官ならではの能力だ。界の狭間に入りこむのである。追うことは不可能だが、アスヴァルのほうもすぐにはこちらへ戻ってこれまい。

ガースが消えると同時に、ずっと鳴りつづけていた大音響がようやく跡切れた。五感を半分以上狂わされていたユーマが、ほっと大きく息をついた。

「あきら……大丈夫？」

おそるおそる尋ねる。あきらはひどく茫然として、ただ立ち尽くしているだけだった。

ライアの手の内で、長剣が音もなく変化した。急に収縮したと思うと、銀の半環の形をとる。美しい装飾のそれは、額に差しあてるサークレット……真実の名を、ディレイ・ルナク。

ライアが前髪の下に頭鐶をはめると、その輝きはまったく他者の目に映らなくなる。誰もルナクの姿を目視することはできないのだ。一方で彼の髪と瞳は漆黒に染まり、そこに立つのはすでに――ライアではなく――眼鏡の似合う、来生衛だった。

「あきら」

彼女の前まで歩み寄り、衛は静かな声で告げた。

「終わったよ」

「……」

どこかうつろな表情のまま、あきらは兄の姿を見上げた。くいいるように見つめる。

それから視線を隣に移す。碧い瞳に青い髪のユーマが目に入る。いや……海の色は吸いこまれるように消えてゆき、明るい焦茶がそれに代わった。心配そうにこちらをのぞきこむ。普段は口やかましいのにこういう時は何も言わない。それが貢。

さらに目を動かしてみる。一人だけ離れて立っている。イオ。服を何カ所も切り裂かれて……その身を鋭い刃に傷つけられたことは確かだった。だが表情はいつもどおりだ。彼は無感情なのではなく、強靭な忍耐力の持ち主であるだけだ。あきらはよく知っている。彼だけは容姿の変化もない。金に近い褐色の瞳と髪。浅黒い肌。それが本来のイオであり、閃でもあるのだ。

そしてもう一度、すぐ目の前の影。コートの肩と胸には暗い染みが広がっているが、すでに出血は止まっている。彼らは以前から、普通の人よりも傷の治りは早い。

一番大人のくせに、誰よりも内面は激しい。だからこんな怪我をする。優等生の顔を見せておいて、とんでもない無茶をして人を驚かす……。

「終わった？」

あきらが問いかけると。衛は困ったような微笑を浮かべた。

「ひとまずは、と限定するけれど」

「……それだからえーちゃんは信用できない」

「全部話すよ、隠していた事は全部」

恨めしげにあきらが呟き、衛はあっさりと降参してみせた。

「仕方ないね……」

貢もそう言って、ため息をつく。

閃は無言だった。眼差しだけをあきらに投げて。

「さて……帰るよ」

号令をかけるのは長男の責任だった。

「人目につかないように帰らないと、途中で救急車を呼ばれかねないな……。俺と閃だけ、別



ルートで帰るか？」

「……平気な顔で歩いていれば、人は……案外、気付かないが」

「それは閃だからだろ!?　ぼく恥ずかしいからこういう血みどろな人たちと一緒に歩きたくないぞ！　さあきらっ、さっさと一緒に帰ろ帰ろっ」

すっかり彼らはただの来生兄弟に戻っている。なんだか気がぬけてしまって、その時になってあきらは忘れていた重大なことを思いだした。

「こ」

ぽつりとこぼれた呟きに、三人が振り返る。

「何？　どうしたの、あきら」

代表して貢が尋ねた。

「こ」

「こ？」

あきらは無表情にくりかえし、貢がますます怪訝に問いかける。

「こ、こ……」

「こここ？」

すでに会話になっていない。

と。

がしっ、といきなり貢の肩にしがみついたと思ったら、あきらは一言。

「……こ……怖かったああっ！」

「あのね……」

一気に拍子ぬけしつつ、ぽんぽんと背中をたたいて貢は彼女をなぐさめた。衛と閃が二人して複雑な視線を交わしあう。乙女の心理は微妙なものだったのだ。

「でもさあ……」

これも役得とばかりにしっかりあきらを抱きよせておいて——ついでに残りの二人に勝利のVサインなど出して——、しかし正直に貢は呟いた。

「いちばん怖かったのってあきらだぞ、はっきり言って……」

Ⅳ

完全なる閉鎖球の内面を大地とし、その中点を天となす。

そのように形づくられた界があった。

数々の世界がある一点を接点として並列する、この宇宙。それら幾多の『界』のなかでも最

も恵み栄え、宇宙すべてをさえ支配するかと唱われた至高の地。
神の祝福を与えられた楽園と称する詩人もあれば、月光を統べる絶対の存在と自らを讃する王もあった。
それはとても狭く小さな世界。暮らす者たちの数は決して多くはなかった。自然のなか狩猟と農耕を営み、神殿を敬い、王の采配を自らの意志として、人々は争うこともなく日々を生きていた。
それは生命ある者と生命もたぬ者の世界。生命ある者とはすなわち人であり、獣であり、草木であり、大地と湖である。生命を有さずして生きる不思議な——不死の者たちは精老と呼ばれた。彼らには肉体すら必要とされず、自然界のすべてが精老の宿りであった。
それは美しく、因果力に満ちた高貴なる世界。
すでに失われ、二度と還らない……
彼の地は〈月斎の地〉。
その名は〈琅月界〉。

琅月界がそれほどに栄えた背後には、やはり原因というものが存在する。
因果力。存在そのものにともなう力のことである。本来、ひとつの世界にはその世界独特の

因果力（エール）が必ず働いている。他の界とは決して同一のエールを有し得ない。異なるからこそ、いくつもの世界が隣立してなお互いの世界を侵蝕（しんしょく）しないという、多元世界間のエネルギーバランスが保たれる。

だがもしも異次元世界への扉をひらき、二つの世界を支えるエールを仲介する者があったとするなら……？

まったく異質なエールを『翻訳』し、自分の属する世界へととりこむ能力者がいたとするなら……？

それは片方から生気を汲（く）みとり、片方へ注ぎこむという作業だ。一歩間違えれば、ひとつの世界を生かすために別の世界を衰退（すいたい）させ滅（ほろ）びに追いこむ、そんな事態を招くことにもなりかねない。ただしそのバランスさえ誤らなければ、他の界からエールを運びこむことにより、どんなに小さく脆（もろ）い界であっても、活力に溢（あふ）れた高次の世界へ造りかえることができる。

琅月界は、その点において、まさに神の祝福を得た世界だった。そこには乙女がいたのだ。

「祝福を運ぶ乙女」――すなわち多元界のエールを制御する者。

彼女たちは、生まれながらにその能力を得ていた。人々は彼女を畏怖（いふ）し、崇拝（すうはい）し、精老は彼女に深い共感と親愛を表した。

そして精老は〈界使（かいつかい）〉たる彼女たちに、ある称号を与えた。何者にも冒（おか）されぬ――それは王

や神官であろうとも——孤高を保つ、誇りたかい者であれとの意をこめて。
エクサールと、彼女たちは呼ばれた。
その存在は、琅月界を文字どおり支えていたのである。
しかし……。

「やだやだ!!　絶対にやだ!!」
そう主張して、あきらは籠城作戦に出た。兄たち三人が語ろうとした『話』を、絶対に聞きたくないとはねつけて、自分の部屋にたてこもったのである。
「そんなこと言ったって、あきらが隠し事するなって言ったんじゃないかっ。ちゃんと話しとかないと、この先何かあったときに困るのはあきらなんだからね！」
「困んないからいいっ!!」
「そんなのわかんないだろ、あきらっ」
「あきらこれから一生困らないことにする」
「……無茶な理屈、使ってんじゃないっ!!」
二階では貢が苦労している。論理をまったく逸脱した部分であきらが反発しているため、なだめすかそうにも一般の常識が通用しないのだ。

「女の子だなあ……」

来生芳秋はそう評した。柔軟にどんな不条理も認める一面と、現在の生活に変革を許さない保守的な一面とが、何故か見事に同居する。確かに――今のまま何も知らずに生きてゆけたらどんなに幸せだろう。

だが過去はすでに彼女の前へ、その影を現してしまった。

過去は足枷だ。未来へ生きれば生きるほど、過去は重くその足を縛る。だからといって人はそれから逃れるわけにはいかない。

生きていく以上、人にできることはひとつ。のりこえること。未来へつなぐこと。

「よくもまあ、これだけ体中に傷をつけられるもんだ」

閃の怪我の手当てを終えて、来生芳秋は救急箱の蓋を閉じた。元外科医の腕の見せどころである。

言われた閃のほうは特に答える言葉を持たず、ぼんやりと黙っている。彼といい衛といい、傷の深さが疑わしくなるほどに平然としているのは……いくら常人よりも少し回復力があるからといって、それだけで説明できるものでもないだろう。

鍛えられた精神と肉体。禁欲的な自己統制。

「まあ、それでも顔が無事で何よりじゃないか？」

「――……庇うから……」
明るく結論づける養父に、閃は大真面目でぽつんと答えてみせた。
「え？　何だ、そうなのか？」
「うん」
「そうかそうか、偉いぞ。顔だけは大事にするんだぞ」
「うん」
おおらかな来生芳秋に対しては、閃もただ単に素直である。
食卓の椅子にかけ、すでに治療をすませた衛は黙然とコーヒーカップを傾けていた。目の前の二人の会話と、二階から響いてくる騒ぎとを半々に耳に入れながら。
「衛」
伏し目がちに、閃が問いかけた。
「……行かないのか？」
あきらのところへ。
無言の部分を衛はもちろん了解したが、彼はふわりと隙のない微笑を返した。
「そちらこそ」

エクサール。
界境の扉をひらき、奇跡をもたらす乙女。
欲に溺れ、エクサールの力を自らのために欲する者も、やはり皆無ではなかった。
エクサールの悪用は琅月界のみならず、宇宙全体へ害を及ぼす。そのため、エクサールはこの世に生を享けた時点より、俗世から隔離され、天に浮く〈央界神殿〉にて育つこととなっていた。
そして彼女を護衛し、教育し、最も身近な相談相手としても仕える、特殊能力をもった若者たちが存在した……。
優れた頭脳、強靭な身体、高潔なる精神、さらに精老より伝授された『使鍵』――これらすべてを有する者。多くの候補者のうち、厳しい選抜を通過して頂点を極めた者。
守護師団。
名誉あるライエノーツの一員は『守護者』と呼ばれる。己がすべてを抛ってもエクサールに忠誠を誓う戦士。
使鍵とは、生命体ではない。それは自然界と交信するための資格であり、文字どおり鍵である。自然を構成する要素のひとつと深く結びつき、ライエスに特別な力を与える鍵だ。
精老が、ディレイを授けるに足ると認める相手は、決して多くはなかった。それゆえ歴代の

ライエノーツは常に少数精鋭であることを余儀なくされていたのである。

百五十九代目のエクサールは、ディシスとレアという双子の姉妹だった。一代に二名のエクサールが現れることには前例がなく、神殿の中枢部の者たちには凶兆ではないかとも囁かれたが、二人はすこやかに育ち、無事に成人した。

彼女たちを守るライエスは四名。

光使ライア、炎使ガディス、風使イオ、水使ユーマの四人である。

なにもかもが平和に、穏やかに運んでいた。気立ての優しいディシスと、活発で無邪気なレア。

――そうだ、あの神官アスヴァルさえ、ディシスの前に現れなければ。

「あきらは……」

独白のように閃が言った。

「知らずには、いられない……」

衛は無言のままそれを聞く。

「だから、待てばいい……。ただ、待つことは待たないことと、同じくらいに辛いことだ。俺

が言いたいのは、そういうことだ」

「俺が言いたいのは……閃が、俺に対して優しすぎるってことくらいだな」

一瞬だけ切なげに眉をひそめ、だが次の瞬間には、すでに彼は普段の余裕を回復していた。

「つまり貢は前座、実は後から真打ちが登場してお姫様をかっさらうという筋立てさ。いざ出陣、お先に失礼する。ふふふ」

瑕瑾のかけらもない端正な身のこなしで、衛は立ち上がる。ついでに軽く一礼して。

そして彼は去り、閃はひとり食卓に残される。一部始終を傍で聞いていた来生芳秋氏は、どうしてこいつらはこうも不器用なんだかなあ、とひそかに嘆息した。

「ねえ、あきら……」

いいかげん怒鳴り合いにも疲れた頃に、ぽつりと貢が切り出した。

ドアの前までベッドをひきずってバリケードを築いたはいいが、あきらのほうも体力を使ったら頭の中がスッと冷えてきて、なんだか妙に落ちついてしまっていた。

「ぼくたちだって、別にあきらをいじめたいわけじゃないんだ」

あきらだって、別に彼らにいじめられているとは思わない。

そんなこと思うわけないのに。——貢の発想は、いつもどこか飛んでいて面白い。

「ただ、あきら、ぼくは今まで何も知らせずにいることがあきらにとって一番いいことだと思ってた。だけど今日のことで考えが変わった。今までが間違ってたとも言わないけど……事情が変わったんだ。ことはあきらの身の安全にかかわるし、それに何よりこれからのあきらの人生を決める」

人生。

大上段なようで、それでいてすんなりと胸に入ってくる言葉。

「人生とか未来とか、そんなもの、他人や運命なんかに決められちゃう人じゃないだろ、あきらは」

「みっちゃん……」

「来生家の家訓だろ」

「……」

魂は譲り渡さない。それは確かにあきら自身が望んだことだった。

けれどあきらは気付いてしまっていた。偽りの日々を壊せば、真実の自分は手に入るだろう。ただし、その代わりに……

失われるのは、来生家そのもの。

「だって……」

ドアを隔てて、あきらは小声で告げる。
「だってさ……みっちゃん、あきら本当は知ってたよ、あきらたち兄妹じゃないって」
「――――」
今度は貢の声が跡切れた。
「だって、いくらあきらに記憶がないったって、本当の両親とかの話題があまりに出ないもん。写真も手紙もないし。最初は、あきらに気兼ねしてわざと触れないのかって、考えてたけど」
「……」
「で、父っちゃんの作ったカルテ見たら笑っちゃった。血液型がさ、えーちゃんがAで、せんちゃんがBで、みっちゃんがABで、あきらO型だって。バラバラなんだもん」
「……」
「でもそれだけじゃ、まだ決定じゃないって、いつもは思うようにしてた」
「……案外、人が悪いな、あきらも」
「うんうん、やっぱ家庭環境のタマモノだよね。みっちゃんの躾だよね」
「あーきーらー……」
貢が唸る。

確かにこれは貢たちにとって、大した迎撃だった。

現在の関係は崩したくない。それを願う気持ちは、あきらよりもむしろ貢のほうが強いくらいだ。だからこそ……。

「あきら、あんまり貢を追いつめないでほしいんだけどな」

貢の背後から、助け舟が出た。

包みこむような優しい声で。

出たな、と貢はため息をつきながら振り返る。こういうタイミングで出てこられたら場を譲るしかないではないか。

「悪いな」

「いいけどね……お兄様」

声には出さず、口を動かして囁きあう。完璧に落ち着きはらった衛の態度に、こいつやっぱり性格悪いぞ、と貢は確信した。

その一方で、彼に頼らざるを得ない自分自身というのも……情けないといえば情けない。結局、そういう役割分担ができてしまっているのである。

「あきら、聞きたくなかったら聞かなくていい。ひとつだけ話させてくれ」

ドア越しに、あきらはそんな衛の声を聞いた。



そんなこと言ったって、と思う。耳に入ってくるものを、どうやって聞くなというのか。しかもそれが衛の言葉で。

「……そういうのって、ずるい」

「卑怯でも卑劣でも、なんとでも好きな言葉を並べていいよ。少しくらいは気が晴れるかもしれない」

臆面もない台詞が返ってきた。一度やると決めた以上は手加減しないのだ。

「じゃ、あきら聞かないよ！　絶対に絶対に聞かないから、何言ったって全部ムダだからね！」

「うん、いいよ。……あきら」

「本当に聞いてないから！」

「君にはお姉さんがいる。双子の姉さんだ」

姉!?

ずきりと心臓が鳴った。あきらは慌てて両手で耳をふさいだ。

「知らない！　聞いてない！」

「彼女の名はディシス、君の本当の名前はレアだ。メサイエ・エクサール・レア。レアは月狼の象徴、ディシスは月華。姿かたちはまったく変わらないのに、君たちはその名のとおり、ま

るで違う個性の持ち主でね……だけどとても仲の良い姉妹だったよ。……見ていて気持ちがいいくらいに」

そんな人知らない。

耳をふさいでも駄目だった。神経のすべてがその名へ向けられ離れようとしないから。

「マイラ・エクサール・ディシス……」

その名を呟いて、衛はそこでしばらくの間をおく。

彼女の名前そのものが、ひどく大切な宝であるように。

汚せない、美しく澄んだ湖の幻像（イメージ）があきらの胸にふと広がった。衛の言葉の響きが伝えるもの。きっと彼自身が抱きつづけたイメージ。

……どうして？

どんな人？

姉？　姉なのに何も知らない。一片の記憶もない。その人に対して自分がどんな思いを抱いていたかさえ。

だが嘘ではないことだけが、何故かわかる。

その人が確かにいたこと。

「今日、君の前に現れたのは、礼神官アスヴァル……琅月界では、大神官、主神官に次いで三

番目の地位に立っていた男だ」

不意に衛の声音が変わる。とても平静に、そして冷ややかに。

「界を超えるときには時間の逆流現象がおこる。俺たちも皆そうだった。奴はあんな子供の姿にまで若返ってしまっただけで、中身は大人と変わらない……。外見に惑わされて、最初のバス事故で気付かなかった俺たちが悪いんだ。もっと早く、あきらに話しておくべきだった……」

聞いてなんかいない、と言い返さなければならないのに。

あきらは大きく両目を見開いていた。凍えそうに手足が冷たくなって。ズキズキと背中から胸へ走る痛み。正体不明の痛み。

あの時の、アスヴァルに対する衛の怒りが、憎悪が、激情が、これから語られるすべてのことをすでに説明し尽くしている気がするのだ……。

どうやってそれを聞けばいい？　どんな気持ちでそれを感じればいいのだろう。決められない。自分自身の感情なのに。何の用意もできない。

「衛？」

ぽつりと、貢が小声で問いかけたようだった。大丈夫だ、と囁きかえす声が……した。

もしかしたら。

語ることもまた、ひどい苦しみを彼に与えるのかもしれなかった。残酷な役割を自らに課し

て、それでも衛は言わずにはいられない。
あきらはそれを、聞かずにはいられない。
たとえ何が語られようと。
そして、衛の声が、ドアの向こうから、あきらへと届く。
「君の姉さんは、アスヴァルに殺された。俺は永遠に奴を許さない……この手で奴を殺すまでは。その為なら地獄に堕ちてもかまわない。
あきら、俺はディシスを愛していたよ……」

V

少年がこちら側へ戻ってきたとき、月はすでに西の空へと傾いていた。
夜更けの公園に彼は現れ、ぐるりと周囲を観察した。北風の吹きぬける自然公園に、こんな時間、遊びに来るような物好きはいないようだ。
「ひどいな……」
苦笑まじりに呟いて、彼は咳きこむ。胸郭に広がる痛み。何度も何度も。
「……まったく、手加減というものがないんだからね……。さすがは、月狼の……」

もちろん、甘い期待などは初めからしていなかったのだ。

四年という長い時間――ディシスのいない日々は百億の年を数えるに等しい――捜しつづけた、もう一人のエクサール。ようやく見つけた。その能力が健在であることも確認した。問題は、ここから先である。

なんとしてでも、レアを手に入れなければ。

少年はまだ痺れの残る足をゆっくりと運び、公園中央に据えられた噴水に歩み寄った。噴水は作動されておらず、今はただの人工池である。そのへりに腰をおろし、少年は再び咳きこんだ。

レアの怒りをかうまでもなく、この四年間で身体はもう内側から確実に破壊されつつある。ガースの――司杖の強すぎる光に灼かれるのだ。美しい短刀に秘められた強烈な力は、エクサール以外の者を容赦なく排除する。

それでもまだ、手離すわけにはいかない。ガース。エクサールの能力に指向性を与え、増幅する……切り札。

簡単にレアを得られるとは思わない。だからこそ、すべてはこの司杖の使い方にかかってくる。少年は黄金色の柄を握り、わずかに鞘から引きぬいた。

水銀灯のしらじらとした光をうけて、聖光石でできた短刀は冷たくきらめくだけである。

「ディシス……」
広漠とした夜のなかで、少年は幸福な呟きを漏らす。
「もうすぐ、君のところへ還れる……」
夢を見るような――無垢な面差しで。

ここは孤独の地。
それは物質と精神の世界。
衰えた大地の息吹。だが熱と力に満ちた生命の胎動。
ここでは誰もが自分の歩む道を探して彷徨っている。そして君がいない。君の姿だけが見えない。
我が在るは〈流転の地〉。
その名は〈炯月界〉。

第三章　望郷の果て

I

二日の間、冷たい雨が降りつづいた。街は白とグレイの中間色に覆われ、息をひそめたように静かだった。

ようやく空が穏やかになり、太陽の光が地上まで差しこむようになったのは、三日目の早朝である。

まだ風は水分を含んで、ひやりと寒い。薄い靄がかかり、まるで美しい風使の姿が他者の目に触れることを、大気そのものが拒んだようだった。

来生家の庭には植物が多い。四季をとおして花が見られるように、閃が手をかけてさまざまな種を育てた。

細かい雫がそれらの枝葉に散り、透明な光を宿している。花壇に踏みこまぬよう、灌木に身を触れぬよう、彼なりに細心の注意を払いながら閃は庭を歩く。だが耳元をかすめた風のせい

であっさりとその集中力は乱され、次の瞬間、彼は夾竹桃に半身を突っこんでしまっていた。
ざっ、と水滴がはねた。
「ああ……」
自身が濡れたことよりも、せっかくの雫の装飾を破壊してしまったことのほうが、彼には大問題であるらしい。来生閃は小さな溜息をついた。
「ごめん。びっくりさせて」
「……いや」
現れた影に向けて、閃は首を横に振ってみせる。
「びっくりした、俺のほうが、悪い……」
あまり説得力のない理屈だが、閃とはそういう発想の持ち主なのだ。
「……じゃ、どっちも悪くないことにしよう」
両手を背中のほうで組み、明るい調子であきらが言った。
「やんなっちゃうよねー、これだから女心と秋魚っていうわけだよ」
来生貢はぶつぶつとぼやきながら、コンロの上にやかんを放りだした。
やかんが着地すると同時に、水道の蛇口からは自動的に水が流れだし、勝手に空中を走って

やかんの内へとびこむ。三人の守護者（ライエス）のなかで、最も多く自分の使鍵（デイレイ）をこきつかっているのは問違いなくこの水使だろう。

「女心と……秋の空？」

「そうそう、そういうこと、うん」

日本語を訂正（ていせい）したのは来生芳秋（よしあき）である。貢はうんうんと頷いた。

「秋の空？　……そうかね」

ポストから取ってきた朝刊を、来生芳秋は食卓の上に置いた。ガウン姿で、どっしりと椅子に座りこむ。

早朝六時。

来生家の早起きコンビといえば、この二人のことになる。だが今日は少しばかり事情が違う。

「そうだってば。だいたいあの子ねえ、二日間ベッドから出てこなかったと思ったら」

「仕方ないじゃないか、熱があったんだから」

「そうそう、そりゃ確かに仕方ありませんよ、風邪（かぜ）ひいちゃったんだからさ。だけどそれが、今日になったらいきなり五時に起きだしちゃって……五時だよ。五時！」

「熱が下がったんだろう、つまり」

「そう、熱は下がってたの。それは良かったの、それは。だけどあの三年寝太郎がぼくより先に起きているなんて、天変地異の先触れだよ、きっと！　不吉なことが起こるぞ。信じらんないぞ、ぼくは。しかもベッドから出てきたと思ったら嘘みたいに喋るし食べるし」

「元気になったってことじゃないか、それは」

「そう、それ！　元気になってるわけ！　なんで元気になっちゃうわけ!?　わっかんないよねえ、女の子って!!」

ばしばしとテーブルをたたき、貢は力説する。

「いいじゃないか、元気になることは」

「あああ、そりゃそうですよ、そうだけどねえ……!!」

どうやら貢自身、憤りの向かう先を把握できていないようだった。

あきらが熱を出したとなったら薬だ病人食だと走りまわり、胃に穴でもあけそうに心配していたというのに、元気になったらなったで素直に喜べないのだから……複雑な性分だ。

「いいんだいいんだ、どうせぼくなんか何もしなくてもあきらが勝手に元気になるんだ」

「……それは、おまえさんが拗ねているだけと言わないか？」

「うわあああーっ……その通りだ。ちぇっ」

あっさりと認めて、貢は即座に立ち直る。

「なあんだ、そうなんだ、ちぇっ。くやしいからインスタントコーヒーいれちゃえ」

ちょうどコンロではシュンシュンとやかんが湯気を吐き出すところである。貢は並べたカップにゴールドブレンドをぶちこみ、ダイナミックな勢いで熱湯を注ぎだした。

来生芳秋は黙ったまま肩をすくめた。コーヒー職人という立場上、インスタントは忌むべきものかもしれないが、邪道には邪道としての価値があるので彼は別にかまわない。

「そうかなあ……？」

新聞を広げながら、小さく呟く。貢が手を止めて、ふりむいた。

「元気になったのかなあ、あの子は……」

「そもそも、なんで『レア』が『あきら』になるんだろ……せんちゃん知ってる？」

「……それは、親父様が」

口ごもり、閃は改めて自分の内側から適切な言葉を選ぼうとする。いつもそれは長い時間を必要とし、会話を困難にするのだ。

まして今は相手が相手だった。

なぜかあきらはひどくあっけらかんとして、自分からレアの名を口にする。そこにどんな意図があるのか、閃にはまったくわからない。

三日前、あの晩に、結局あきらは過去のほとんどを知ることとなった。閉じこもることをやめ、部屋を出て、三人の兄に説明を求めたのだ。そして閃たちは、必要と思われる最小限の事項はすべて彼女に話した。その場からは故意に、それぞれの心情が排除され、あくまで『事実』だけが語るべき題材となったのだが……。

「名付け親は……親父様なんだ。レアの名は狼の象徴。狼といえば『あきら』ととっさに連想するそうだ。よくわからないが……」

「……ほんとによくわかんないね」

「親父様のセンスは、かなり独特だから……。俺も、『イオ』が……『姿なき者』の象徴だと言ったら、いきなり『閃』になっていた」

「へえええっ、そういう意味あるんだ！」

「今では、自分では気に入っている。いい名前だ」

静かに目を伏せて、閃はそう言った。

「……『ひらめ』ちゃんでも？」

「それは問題外だ！」

慌てて頭を振り、それから彼はかすかに頬を染めた。実際、閃は現在、彼自身信じられないほど多弁家に近づいていた。

とにかく彼は喋らずにすむことなら――つまり、自分が胸の内にしまいこんで耐えればすむことなら――一言たりとも口にせず生きてゆける人物なのだ。

それが今の自分ときたら。

「姿なき者？　風のことだね。見えなくてもちゃんといるって、そんな感じするね。でもその姿が一瞬だけ閃いて見えるんだ。せんちゃんらしいね。父っちゃん詩人だなあ」

さらりとあきらがそんなことを言う。何の気取りもなく。

「そしたらみっちゃんは？」

「貢は……『恵み与える者』の象徴。そのままの意味だろう」

「だったら恵とか譲とかでもいいのに……わざわざ『貢』にするのって、さすがかも」

「奴には似合いだ」

「……せんちゃん、みっちゃんが相手だと遠慮がない」

「それは……」

つきあいが長いから、と言いかけて、閃は口をつぐんだ。

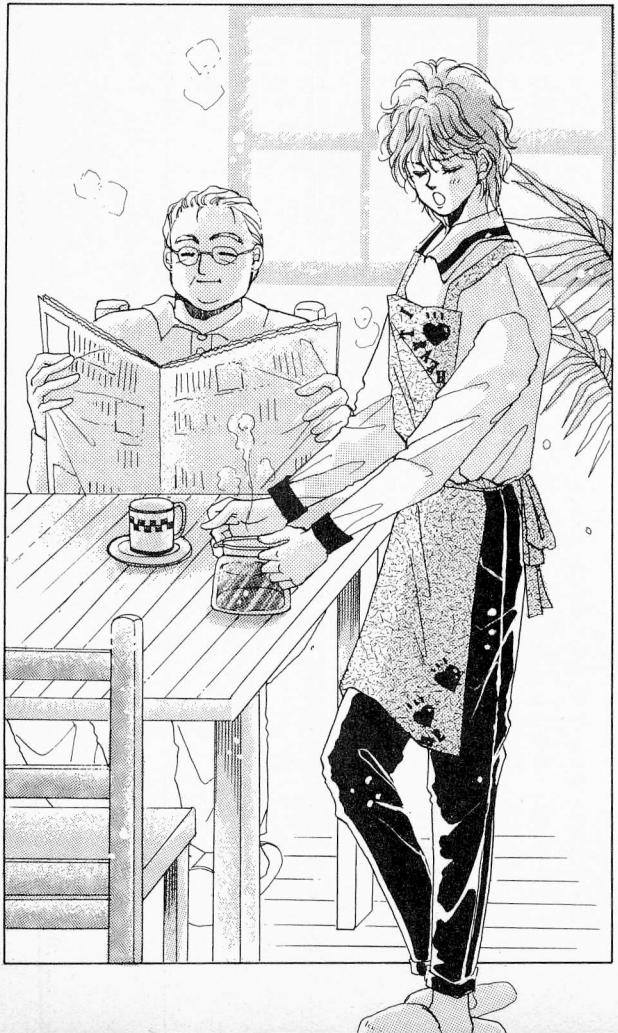
彼女は憶えていないのだ。目の前にいるのは確かに主君たるレアなのに、かつて自分やユーマがどのように彼女に接し、どれほどの忠誠を彼女へ向けていたかを。

「……わからない。相性の問題だろう」

「ふうん？」
あきらが首をかしげる。
「ライアの名は、特別な意味を持つ……」
強引に、閃は話題を先へ進めた。進めれば進めたで、別の後悔が待ってはいたのだが。
「ライエスとしては、最上の称号だ。『守護する者』というんだ……」

「女の子ってのは、一筋縄じゃいかないぞ。なんたって、おまえたち大の男が四年かかって納得した事を、あの子は三日間で呑みこんだんだから。それも十四歳の身空で」
「大の男ってやめてくんない？　ぼく琅月界でもようやく成人したばかりだったんだからさ！」
「二十歳の男がこっちに来て四年経ったら二十四だ、立派に大人だろうに」
「いいの！　十六なの、まだ！」
貢は頑固にそう言い張り、それからふと真顔になる。
「でもあの子みたいに、むこうでの二十年分が完璧にゼロだったら、それはそれで幸せかもしれないね。だからもう、あきらはあきらで、レアなんかどこにもいないって、そう言っても誰も困らないような日が早く来ちゃえばいいんだけどさ……」

コーヒーカップを受けとりながら、来生芳秋は感慨深げな表情を浮かべた。
「実現しそうかい？」
「さあね。ぼくはいいんだ。ぼくは。ぼくにとっての主人（レア）は健在だし、ぼく自身は一生レアを忘れないけど、そんなこととは関係なくあきらは幸せになればいいし」
問題は、レアとしての役目を彼女に期待して、あきらの意志を侵害する輩（やから）だ。——アスヴァルはあきらの存在など初めから無視している。
「ぼくはいいんだ、あきらが幸せなら」
もう一度、貢はくりかえした。
「だけど、誰もがぼくと同じように思えるかっていったら、そんなのは理想論だってことも、よくわかるよ」
「……ふむ」
来生芳秋が息をついた……その時。
がたがたがたん、と二階で足音が動いた。天井を見上げて、貢がやや同情の色をその眼差しに含む。
「これだからなあ、あの人も……」
足音はすぐにひそめられたが、その主は瞬時に階下へ移動し……



「貢！　あきらの姿が――」

ばんっ、とダイニングキッチンの扉が吹っとびそうに開いたと思ったら、姿を見せたのは案の定――来生衛だった。

「やめてくださいってば、お兄様。あの子なら庭だよ」

なだめるように貢が言い、親指で庭の方角を示す。

「……庭？」

「どうせ閃が一緒なんだよ、心配いらない。熱も下がっちゃってさ」

「……そうか……」

肩から力をぬき、衛は漆黒の髪を指でかきあげる。なんとか平常心にたどりつこうとする……努力がうかがえる。

やれやれ、と貢は思わざるを得ない。

「お兄様こそ、ここに現れるの久しぶりじゃないか。ちゃんと食事してた？　ぼくあきらの世話にかまけて他の人たち放っぽってたけど」

「お兄様の生活から自己管理の四文字が消えることはないさ、弟よ」

さすがに切り返しは優等生だ。すでに条件反射ができあがっているのかもしれない。

「ま、コーヒーでも飲んでのんびりしてってくださいよ、ダンナ。インスタントだけどさ」

「……いや、遠慮させていただく」
紳士的な仕草で衛は片手を振り、そのまま貢たちに背を向けた。
「今の登場は非常に不本意だ。出直すことにするよ。朝のコーヒーと『おはよう』はその時まで取っておいてくれ。では失敬」
「あ、そう……」
行ってらっしゃい、と貢はその背中に手を振った。
過去を語ってしまった今、最も微妙な立場にあるのはこの長兄だった。貢も閃も、自分たちと『ライア』の決定的な差異を承知している。だからこそ『来生衛』としての彼をあえて尊重してきたのだが……
「言うかなあ言うかなあと思ってたら、本人が言っちゃったからねえ……」
「……そんなに大変な事かい？」
来生芳秋が尋ねる。
「大変だよ！　あきらはレアで、ぼくらは守護者ですって、それがバレてなきゃ話は別だけどね？　変なとこで馬鹿正直なのよ、あの人は！　――ま、そりゃ、ライエスとしては当然の発言だしぼくが口出しする問題でもないけどっ」
口出しする問題ではなくても、気苦労は存在するのだ。貢は深刻に頭を抱えた。

「まったく、なんでディシスのことなんか……」

ライアは『守護する者』。

数多くの候補者から選びぬかれ、そして最も優れた者に授けられる称号。

「……それじゃ、せんちゃんたちの名前って、本当の名前じゃないんだ!?」

「え……？」

驚いて尋ねたあきらに、閃もまた不思議そうな視線を返した。

「本当の名前？　……本当の、名前だよ」

「だけど、称号って、後からもらうものでしょ？」

「ああ……ライエスは、その時から、それが本当の名前になる」

ようやく腑に落ちた様子で、閃はぽつぽつと説明する。

使鍵を得た時点で、ライエスとなる者は、それぞれの本質に応じた称号を与えられる。そのとき彼らは過去のすべてを捨てるのだ。それまでの己の名も、家族も、故郷も、何もかも。

「……」

目の前に立つ、見慣れたはずの次兄の姿を、あきらは愕然として見つめた。

「……忘れちゃうの？」

「忘れはしない。捨てるだけだ。自分とは関係のないものになるだけだ」
平然と閃が答える。
そのほうがもっと酷い。
記憶を完全に失うならば、自分のように、新しい世界をそのまま受けいれて、そのことで苦痛を覚えることもないだろうに。
あきらにはそう思える。
「忘れることが幸福だとも言えるし、忘れないことが幸福とも言える。……同じだ」
あきらの気持ちを読んだように、閃が言い足した。
愛想のかけらもないが、それが彼なりの気遣いなのだろう。
「それに、後悔するような者なら、初めからライエスになろうなどと思わない」
「なんで？　それがわかんないな。なんでそんな大変な役目に、自分から志願したりするのかわからない」
「……」
金褐色の静かな瞳が、そっと揺らいであきらを見た。
自分がそれを言ってはいけなかったのだ、とあきらは気付いた。レアが。
「……エクサール？」

「……」

「エクサールのせい？」

「違う！」

閃が強く頭を振った。

「違う……そういう風に、考えないでくれ……。俺たちは皆エクサールのために存在するが、それはエクサールの犠牲になるということとは違う。それだけは間違えてほしくない」

その言葉は確かに閃の誇りに支えられている。

「……ごめん……」

あきらは呟き、そして両腕をのばした。閃の左腕にするりと両手をからめて、よりかかるように彼の袖に額を押しつけて。

「――――」

閃が何か言いかけて、結局やめる。気付かずにあきらが続けた。

「あのさ、あきらわからないんだよね……あきらのことは全部。けど、しばらくはわからないままでいることにしたんだ。もともと十年分の記憶なくても普通にやってこれたし、それが二十年分になってもそんなに変わんないや」

「……そうか」

「無責任かな？」
「いや……責任は、これからの局面で問われるものだ。それに、俺たち自身が、あきらに多くのことを要求しすぎている……。あきらであること、レアであること、エクサールであること、俺たちの……」
妹であること。閃はその一言を、故意に封じた。
「……だから、あきらの選択は正しいと思う。逆に、この時点であきらが一色に染まってしまうのは……早すぎる」
「せんちゃんの言葉って重みがある。それって優しいよね」
腕につかまったまま、あきらが言った。閃は彼女を見ることはせず、庭から続く雑木林の奥へと視線を流した。
優しい？　衛もそう言った。……そんなものではない、と閃は思う。
臆病なだけだ……。
「俺が何故、ライエスになろうと思ったか、教えようか……？」
何か言わずにはいられなくて、閃は口を開いた。
「え？」
あきらが顔を上げる。

空いている右腕でその肩を抱きよせる、などという芸当ができていれば、余計な話はせずにすむのだ。だがこの不器用きわまりない風使に、それは望むだけ酷というものだった。

「十歳のときに、初めて央界神殿に行った……選抜審査で、大勢の候補者が集められたんだ」

「央界神殿？」

「天の中心にある。美しい所だ」

閃は過去形を使わない。今も神殿がそこに健在であるかのように。

「そこで、俺たちは皆、ほんの短い間だったが……エクサールの双子と対面した」

彼女たちはまだ八歳……。集まった少年たちは、ひどく遠くに二人の姿を拝しただけで、その声すら聞くことはなかった。

けれど……

「そのとき、俺にはわかっていたんだ。俺はレアの守護者になるだろう……それが叶わないことなど、あり得ない。そう信じた」

閃の表情が、ふわりと澄んだ。

「そして、そのとおり叶った」

「……それって、理由？」

「他に理由がない」

生真面目に閃は答え、あきらは溜息をついた。
「なんか、凄いな……」
そんな確信を――つまり、願いを――向けられるほどに、『レア』は魅力的だったわけだろうか？
「そこまであきら立派になれるかな？」
「立派？」
閃は意外そうに目を見開いた。
「レアはあきらと変わらない。元気で、いつも走りまわってばかりいる、勇ましい子だった……」
「その表現じゃ男の子だよ、まるでーっ」
「そこがいい」
「……せんちゃんって、変だぞ」
「失礼だな。俺もユーマもその点では意見が一致して……」
言いかけて、閃は口をつぐんだ。
――これだ。これだから喋りすぎるとろくなことがない。
「どの点で？」

第三の声がそこへ届く。あきらが振り返り、閃はわずかに両眼を細めた。
「立ち聞きする気はなかったんだが……」
やわらかく、だが凛然と、そう告げて彼は足を止める。
「おはよう。病みあがりの姫君をお迎えにあがっただけなんだ」
嘘をつけ、と閃は思わないでもなかったが、あえて無言を通した。口にすべき台詞も思いつかない。
「その姫君を一度も見舞いに来なかった騎士は誰だっけ？」
責めるように睨みつけて、あきらがそんな一言を投げた。遠慮のないその態度に、衛は少しだけ安堵を含んだ苦笑を返した。

百五十九代目のエクサールは双子の姉妹。そして彼女たちを守る守護者は四名――。
よって彼らは神殿の命により、次のように己が主を定められた。
妹のレアに属するは、水使ユーマ、並びに風使イオ。
姉のディシスに属するは、炎使ガディス、並びに光使ライア……。

Ⅱ

「……ずいぶん、長話をした」
ぽつりと、閃が口を切った。
「あきらが病みあがりと、気付かなかった、俺の不注意だ……」
陽光は強さを増し、靄も晴れようとしていた。冷たい朝の外気が、彼女の身体に良いわけがなかったのだ。――そのように、自分の思い至らない隙を見抜くのが、この衛という相手なのである。
「そんなに気に病むことじゃない」
そして衛は微笑してみせるのだ。閃の心に根づいたコンプレックスなど、まったく感知していないと思わせる。
勘は鋭いはず。だがあまりに完成されたポーカーフェイスが……。
――やめよう……。
閃はかすかな、誰にも気付かれぬような吐息をつく。どうしてこんな風に、疑心暗鬼に陥らねばならない？

「あきら、貢が熱いコーヒーをいれて待ってる。インスタントだけど」
「なんだとー？　みっちゃん手ヌキだなあ」
「先に行ってあったまっておいで」
「なあに、二人して悪だくみ？」
あきらの態度はいつも通りだ。馬鹿だな、と衛は彼女の頭を小突いてやり、
「貢が拗ねてるから花を持たせてやるだけだよ」
「みっちゃんが拗ねてどうするんだろ……。わかった、断固モカをいれさせてやるっ」
長い髪を軽くはずませて、あきらはくるりと踵を返した。
が、その直後。
「!?」
衛と閃が同時にぎょっとして視線を互いの間に落とした。がしっ、と両腕で二人の片腕をそれぞれ占拠し、ほとんどぶつかるようにしがみついた影——。
「あのね」
二人の腕に体重をかけて、顔は伏せたまま、あきらが言い聞かせた。
「あきら元気だから！　あきらはあきらから変わんないから！　心配いらない！　ね!?」
「……」

二人とも、何も言えなかった。素早く身体を離し、あきらはにっこりと笑った。
「それだけ！　邪魔してごめん。後でね！」
そして彼女は身をひるがえし、今度こそ家の中へと戻っていった。
閃は隣に立つ『兄』に目をやった。衛は、あきらに摑まれた右腕を持ちあげ、何か考えているようだったが、閃と視線を合わせると肩をすくめてみせた。

「貢には叱られた」
庭と雑木林を隔てる柵に、衛は手をかけた。身を支えるように。
「ディシスのことなど忘れて、初めからあきらの守護者であるように振る舞えば、何も問題は起こらないんだそうだ。……だが、ライエスである以上、その要求に応えるのは不可能だな。おまえになら、それがどういうことかわかるだろう？」
「……ユーマだって、本当はわかっている」
「ああ、それは承知している」
衛が頷く。閃は沈黙した。
レアを忘れて、別の主人に仕えること――想像さえも、閃にはできない。口にも出せない。恐ろしすぎて。

ディシスはもういない……。

あの終末の世界から、妹であるレアをこちらの世界へ送りこみ、彼女のために守護師団（ライエノーツ）の命を救い、その上……アスヴァルさえ、決して見殺しにできなかったのだろう……それ以上、あの美しい乙女に何が可能だったろう？

ディシスはもういない。それは揺るぎようのない事実だった。どんな慰めもそこには存在しない。だから閃には何も言えない。

炎使ガディスは……すでに死んでいるのではないか、と閃は思っている。主君ディシスに殉じて死んだのではないだろうか。

もしも自分であれば、きっとそうしている……。

「ライアには、感謝している……」

低く、噛みしめるように、閃が言った。衛が振り返る。

「感謝？　……俺には似合わない言葉だよ」

「いや……。レアを、見捨てずにきてくれた。ユーマと俺の二人きりでは、こんな風に四年間、やってこられたかわからない……」

本音だった。知っている者などひとりもいない、この新しい世界で、ライエノーツの首席たるライアが味方についたことは最上の支えだったのだ。



「レアに拾ってもらえたのは、俺のほうだ。気にしないでくれ」
衛は首を横に振る。
死ぬことさえ、彼には許されなかった。ディシスは最期の時、信頼する守護者に妹レアを託していったのである。彼女に殉じれば、その命に背くことになる。そしてライアは首席であればこそ、主君の命に背くことはできず……。
「が、確かに少し事情が変わったかな」
不意に、衛がそんな一言を漏らした。閃の瞳に鋭い光が走った。
「私怨に狂ったライエスなんて、見られたもんじゃない。……見ただろう？　おまえも」
衛は明るい言い方をする。
「アスヴァルを前にしただけで冷静さを失ってしまうようでは、ライエスとしては失格だ。レアの守護者としてはね」
「ライア……？」
「かえって奴に足をすくわれる材料となりかねない。俺の存在は、彼女にとっては危険なだけだ。……そして俺はアスヴァルを殺さずにはいられない」
「……」
閃ははっきりと、彼の意図を悟っていた。あり得ないことではなかった。だが、まさか……。

「出て行くつもりか？」
尋ねる声は、わずかに震えた。
「一緒には暮らせない」
それが返答だった。迷いはなかった。
「……少なくとも、奴を倒すまでは」
衛はそう言い足した。
レアの守護者としては、戦えない。そういう事だ。そして叶うなら自分一人で——刺し違えてでも——アスヴァルを倒すつもりだ。閃にはその想いが痛いほど見えた。わかるのだ。わかりすぎて。
「あきらはどうなる!?」
酷だと知りつつ、問わずにはおれなかった。
「あの子は強い子だ」
ライアの微笑。本心を出さない、硝子（ガラス）の。
「大丈夫だ……二人がいれば」
「……本気か？」
「本気だよ。ただし、あまり正気とは思えないな」

「……すまない、ライア」
「何を謝る？」
行ってしまう。彼がここに留まったのは、あきらが元気になるのを見届けるためであったのだろう。だとしたら、もう、ライアを引き止める材料はどこにもない……。
自分なら、一秒たりとも待てない。解放されたい……。それは悲願に近い。
「すぐに行くのか？」
「アスヴァルが、これ以上のんびりしているとも思いにくいからね……」
が、衛はそこで言葉を切った。
閃も、ふと息を止め、ゆらりと視線を移動する。
衛の指が持ちあがり、その双眸を覆う眼鏡に触れた。音もなく引きぬく。反射光。それは琥珀のきらめき。
「……遅すぎたかな」
かすかに、衛がそう呟いた。

Ⅲ

「あきら、学校休むよね、勿論」
「んー？　行くよー？　熱ないし」
あきらはのほほんとしている。貢はオムレツを焼いたフライパンをひっくり返しそうになってしまった。
「違うっ！　ぼくが言ってんのは、今のゴタゴタが解決するまであきらを一人で学校になんかやれないって、そういう意味なの！　いくら同じ学校に行ってるったって、ぼくとは校舎も違えばクラスも違うし！　あきらに何かあってからじゃ遅いんだから！」
「だからあきらは籠の鳥してろって？　そういうの似合わないよ、あきらは……」
「……そりゃそうだけどさ」
それはそうなのだが。
もう少し、自分の価値と立場を認識してもらわないと困るのだ。貢はついついオムレツをかきまぜてスクランブルエッグもどきを製作する羽目になる。
来生芳秋氏は例によって読書室にこもっている。二人の兄はなかなか庭から戻ってこないし

……。

「だってさ、みっちゃん」

テーブルに両ひじをついて、あきらが続けた。さらりと。

「えーちゃん、もうすぐ、ここからいなくなるかもしれないよ。その前にあきらがしっかり強くなっておかないと」

がしゃがっしゃん、と今度こそフライパンが一回転した。

「……え!?」

愕然として貢が振り返る。

「なんたってエクサールだもんね。記憶なくても、いざとなったら自分のことくらい守れるよ、きっと。うん」

「ちょっと待って、あきら、そうじゃなくて……その前！　なんて言った!?」

身を乗りだした貢は、正面にひどく透徹した眼差しを臨み、わずかに息を呑んだ。

気品？　いや、覚悟？　……解析不能の表情。それは一瞬。

「そんな気がした。それだけ」

あきらはその一言で片付ける。

底が知れない。貢は冷気に似たものを感じつつ、彼女の言葉を胸中で反芻する。

ライアがいなくなる？

「おおい」

ドアを隔てて、こもった声がそこへ届いた。親父様だ。

「なんだか外が、騒がしいぞ」

わさわさわさ、という気配がまず伝わってきた。木の葉を揺らすような音。

貢はエプロンを床に放りだした。あきらが椅子から立ちあがる。

カサカサ……乾いた音。

「なんだろ？」

「しっ」

三百六十度、どの方角へ感覚を向けても同じだ。貢は唇を噛みしめる。

「親父様！　そのまま出てこないでじっとしててよね！」

叫ぶが早いか。

甲高い音とともに、明かり取りの窓ガラスが砕け散った。そして、そこから頭を突き出したのは……

「ちょっと待ってよーっ!!」

「うわあ、ふざけるなーっ!!」

期せずしてあきらと貢は合唱してしまった。怖いもの知らずのあきらにも苦手な物というのは存在し、それはなおかつ貢の弱点とも共通するのである。——彼らは二人して昆虫の類が大嫌いだった。

小さな窓をくぐりぬけ、壁をつたって床に降りたち、ぐるりとその頭部をめぐらせる。

……それは、蟻、だった。

体長五十センチ程度。

黒光りする体表。

尋常な大きさではない。しかも一匹では済まなかった。同じような黒い塊が続々と窓へ這いのぼり、そしてガサガサと脚を鳴らしながらこの室内へともぐりこんでくるのだ!

「みっちゃん!! みっちゃん、何これ!?」

「ぼくに答えさせるなーっ!!」

巨大蟻の大群、なんて、口にしたとたんに体中鳥肌立ってしまう。

だが個人的な趣味とは別に、貢は有能なライエスだった。

「あきら、二階だ!」

「了解っ」

彼女を二階へ追いやっておいて、
「ディレイ・ミンス！　竜巻！」
舞台がキッチンだったのは、彼にとって幸運だったろう。蛇口から溢れ出た大量の水流は高速の回転を開始し、貢を中心として円型の壁を築いた。
「来れるもんなら来てみろ！」
超高速で流れる水の壁は鋭利な刃と化し、侵入者を両断する。テーブルやら椅子やらが犠牲となって吹っとんだが、それくらいはやむを得ない。ここから先に巨大蟻が進むことは不可能の……はずだった。
「ユーマ、駄目だ！」
抑えた叫びが、背後から投げられた。
「奴らには効かない……！」
「何っ!?」
とびこんできたのは閃――風使イオ。
壁をものともせず、のそりと先頭の蟻が進んだ。げっ、と貢がひきつる。一匹が水流を通過すると、後は雪崩をうって突進してきた。
「冗談だろッ!?」

貢は反射的に後方の出口へと飛びのいた。入れ替わるように閃が前に出る。
「ザード、切り刻め！」
ビシビシッ、と鋭い音があがった。黒い群れが数瞬だけ足を止める。
が、使鍵ザードが作り出した真空の剣も、わずかに彼らを驚かしただけだった。はじかれてしまうのだ。閃は小さく舌打ちをした。何らかの『護り』が働いている。何かとても強い力。
「イオ！　こいつらもしかしてっ」
貢が気付いて叫んだ。この異常成長と、ライエスの攻撃さえ阻む防御力は。
「足を止めるのが先だ」
冷静に閃が答える。貢はその意図を了解した。
「ディレイ・ミンス、包囲、定着、ザードの声を聴け！」
「ディレイ・ザード、溶けあう大気の領界をミンスの道標へ！」
二つの命は同時に発された。次の瞬間……
「止まれっ!!」
貢の声が合図となった。キン、と軋むような音とともに、室内の温度は急激に低下した。
「！」
黒い塊はぴたりと停止した。

透明な光沢が床といい壁といい、すべてを呑みこんでいた。
氷である。
二種の使鍵が作用しあった結果だ。簡単にはできない。気心が知れている相手でなければ……。
蟻の大群は氷塊に閉じこめられ、だがまだそのまま沈黙するとは思えなかった。
「長くは保たない」
そう言って、閃が振り向いた。
「あきらはどこにいる？」
ガースが招んでいる。
主人の元へ還りたいと、ガースが訴えているのだ。
あきらは全速力で階段を駆けあがった。例の巨大蟻はついてきていない。
「ガース……」
無意識に、その名が口をついて出る。自覚しない部分で、あきらは何が起こりつつあるのか察知していた。

二階へたどりつく。そこで、あきらの足はぴたりと止まった。

「……」

いやな感じだ。とても。

何が問題なのか……それはわからない。あきらは周囲をゆっくりと見回した。誰かいるような気配は、どこにもなかった。

一階からは、何かが派手に壊れる音。貢はにぎやかにやっているらしい。

……にぎやかなはずなのに。

深い静寂のなかに、カタン、とひそかなノックをあきらは聞いた。

振り返る。

廊下の北側つきあたり、あきらからは左手の方向に。

窓。窓を占める緑色。……緑？

「……み……」

緑色が大きくふくらみ、蠢いたように見えた。

植物だ。タンポポの葉!?　巨大すぎるけれど……。

「！」

つんざく音とともに窓が割れた。意志を持ったような動きで、その緑色はあきら目がけて驀

進してきたのだ！

「みっちゃんのばかーっ!!」

これはやつあたりだが、貢のせいにでもしないと気がすまない。あきらは廊下の反対側に向けてダッシュを開始した。凄まじいスピードでするすると巨大タンポポが追ってくる。

「ふざけてるっ」

南のつきあたりにはあきらの部屋がある。とびこんでドアを閉め、あきらは机を力任せにひっくり返した。横倒しのデスクでドアをふさぐわけである。しかし。

「ふざけてるぞ、ガース！」

お伽噺の世界に迷いこんだ気分だ。ドアと壁の隙間から窮屈そうに這いこんでくるのは、巨大アサガオのつるではないだろうか。

あきらは南向きの窓を開けた。こちら側にはまだ異様な現象は見られない。脱出するなら今だという気がした。難を言うなら、靴がないことと、ここが二階でしかも地上までは足がかりが全くないこと、だろうか？

「あきら！」

窓の下から、呼びかける声があったのはその時だった。

「そこから飛びおりろ！　受けとめる！」

ハッ、とあきらは両手で窓枠をつかんだ。身を乗り出した。
立っているのは。
「――えーちゃんっ……!?」
「早くおいで！　潰れたりしないから」
両腕を広げ、そう告げるのは、琥珀の瞳の……光使ライア。
迷わず、あきらはふわりと宙に舞った――。

Ⅳ

小さな砂場が、ある。
葉月奏太はその片隅に腰かけ、待っていた。右の掌からサラサラと細かい砂を落として。
鉄棒もすべり台もブランコも、淋しげにたたずみ、子供たちが現れるのを心待ちにしているようだった。奏太はぐるりとそれらを見回し、誰もいないことを確認する。
校庭をとりかこむように立っているのは、桜の大木だ。春になればきっと美しい花で満ちる。――そう、春が来れば。
この身体は、その頃まで持ちこたえているだろうか。

「……いや、その頃には、私はこの界にはいないはずだな」

軽く頭を振り、少年は独白する。

と。

みるみるうちに、上方の桜の枝がざわめき、木肌が活気を取り戻したと思ったら、薄紅の色が一斉に広がった。記録フィルムの早回しを見ているように、滞りのない、美しい変化だった。

少年は喉を鳴らし、押し殺した笑い方をする。

風に吹かれて、清楚な花弁が散る。

花の嵐に囲まれ——狂った季節に囲まれて——少年はくつくつと笑いつづける。

騒ぎは来生家だけに留まらなかった。

異常生長した植物は罪のない一般家庭の住人を驚かし、動物のようにのたうっては、ある一方向を求めて進もうとした。

街の路地を徘徊する巨大な昆虫には誰もが絶句し、我が目を疑った。それらはまるでたった一人の反逆者を追って疾走する兵士たちのごとく勤勉に、そしてわき目も振らず、ひたすらな勢いで地面を這っていた。人に危害を与える様子はなかったが、その進路を妨げるものには彼

らは容赦なかった。何台ものパトカーや消防車が出動しては六本足の大軍に喰いつぶされ、残骸となり果てる。出勤途中の自家用車が真っ黒な山に覆われ、運転手が命からがら脱出する。非常警報のサイレンが鳴り、上空をヘリコプターが旋回しはじめた。

「どこの研究所の陰謀だよ！」

若いTVカメラマンが、上空からその映像をビデオに収めながら、思わずそう喚いた。確かに、この現状は怪獣パニック映画並みのノリとしか表現しようがない。遺伝子操作の実験材料が脱走でもしたのか!?

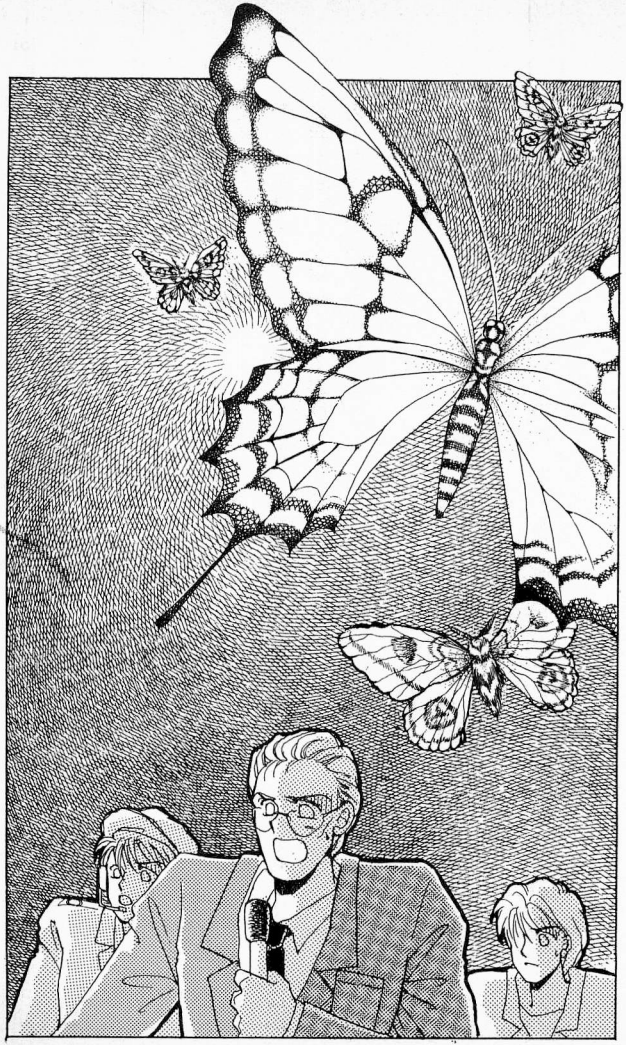
自衛隊員が強化バーナーで焼きはらおうとしたところ、火炎は彼らに対して陽炎ほどの意味しかもたず、逆にバーナーの放射筒を喰いちぎられたらしい。そんな報が飛びこんでくるにつれ、現実感というものはますます薄れてゆく。これをどう報道したらいいんだ、とTVキャスターも頭を抱えた。

「おい！　あれ何だ!?」

窓の一点にポツンと現れた影がある。指差した操縦士に、キャスターはシートから身を乗りだした。

「……蝶じゃねえか？」

言ってしまった後で、彼はひどく後悔した。極小サイズに見えるのは、あくまで距離のいた



ずらであって……。

ヘリコプターの内部で、そのとき大量の血の気が音をたてて引いたようだった。

結論はひとつである。

「逃げろッ!!」

いくつもの声がハモった。

「司杖(ガース)が……！」

あきらが叫ぶ。彼女を抱きとめると、衛はすぐにその場を離れた。今あきらが出てきたばかりの窓から、もう緑色のつるが覗(のぞ)いている。

「えーちゃん、あきら走れる！」

「靴がない。足を痛めるぞ」

「靴！　玄関！」

「そっちはもう駄目だ、どこかで調達しよう」

あきらを抱えたまま、衛はけやき並木の方へ走り出る。

ガースの力が解放されているのだ。それも無制御(むせいぎょ)に。ガースはエクサールの許(もと)へ戻りたがっている。主の姿を——在気(ザイダ)を求めている。

「聖光石の『護り』が奴らには働いている。ガースの衝動が、虫や草を異常化させて、あきらに向かわせているんだ」

眼鏡を外した衛の瞳は本来の色をとりもどし、だが姿そのものは未だ『ライア』まで移行してはいない。

「つかまったら、あきらどうなる!?」

「殺されるよ。ガースの意志ではなく衝動だからね。抑制のきかない欲求は破壊にしかつながらない」

衛の言葉はその内容と反比例して、淡々としすぎている。

「殺されるって……！」

「大丈夫だ、そんな事にはさせない」

決意というより、それは確信。

「ガースの馬鹿っ!!」

あきらも死を恐れる以前に、ガースに対する怒りのほうが大きかった。あんなに通じ合った半身が何故自分を殺しにくる!?

「ガースを責めるな、仕向けたのはアスヴァルだ」

「どうやったら止められる!?」

「こちらから出向いてやるしかない、かな……」
散歩道の中央で、衛は立ち止まった。
四方、八方……迫る気配。嵐の前の静けさだ。
「あきら、ガースの居場所はわかるか？」
「ええっ……!?」
あきらが困惑する。
「んなこと言ったってっ……」
「あきらが呼べば応えるはずだ。現に、前のときは『共鳴』を起こせただろう？」
そこまで告げて、不意に衛は口をつぐむ。
ザワッ、と鳥肌の立つような感覚があきらを襲った。
それは衛から伝わったものだ。昂揚感、のような、もの。
「離れるな」
そう言って、衛はあきらを地上へおろした。
乾いた音が、地面を、アスファルトを這ってくる。道の前方から、後方から。林の奥から。壁の向こうから。
「！」

衛の変貌する過程を、あきらは目の前で見た。
漆黒の髪は黄金の輝きを得る。それは琥珀の双眸と相まって、『光』の具現たるのかもしれない。精悍な、そして鋭利な……光のライエス。
がさり、と黒い触角があきらの視界に現れた、その瞬間。
「ディレイ・ルナク！」
光の使鍵が力に満ちる。
「界を超え〈光使〉ライアが命ずる！　地を汚す蒙昧なる逆徒に、雷撃をもち裁きとなす！　行け、エクサールに道を拓け!!」
轟音が、ライアの声に応えて湧き起こった。
強烈な光が上空から走り、二人の周囲を余す所なく薙ぎはらう。あきらは耳をふさいだ。集結し、周囲をとりまいていた蟲たちは、ことごとく白光に撃たれて動きを失った。
「……死んだ？」
「いや、まだだ。時間稼ぎにしかならない」
ぴくりとも動かない大群を見渡し、ライアはあくまで冷静に言う。
「今のうちにガースを――」
が、その時である。

あきらを目がけて、降下してくる影があった。

「！」

ライアが不可視の頭鎖を引きぬく。瞬時にそれは実体をとり、銀色の長剣に変化する。

ザッ！

凄まじい速さだった。あきらの目には、何が起きたかとっさに判別できなかった。

「蝶!?」

人間ひとり分の大きさ！　交錯の一瞬で斜めに斬りおろしたが、仕取められなかったようだ。ライアは第二撃に構えて長剣を構えなおす。待つ間もなく相手は突っこんでくる！

「ルナク、討て！」

渾身の力でライアが剣を払った。ばさり、と羽がひるがえり鱗粉が舞った。

駄目だ、まだ致命的な攻撃は与えていない。巨大蝶は宙へ逃れ、ひらひらと泳ぎまわる。

「笑ってる……？」

あきらは愕然とした。比喩ではない。上空で、それは本当に笑っていた。嘲笑。

顔がある。

人間のものとは違う。蝶の顔。それに、表情が確かにあるのだ。女の表情があるのだ。

ぞっと寒気がする。異常化はここまで進んでいる。すべてガースの仕業……。

「ライア！　加勢する！」
後方から新たに何者かが呼びかけた。
「助かる！」
ライアが応じる。
危機を感じたのか、大きく蝶が上昇した。
そこへ――。
「ディレイ・ザード！　気流を！」
突然、激しい旋風が蝶を呑みこんだ。バランスを失い、きりきり舞いして蝶が落ちてくる。
無言の気合いとともに、ライアが長剣から烈光を放った。
落下する標的は、見事に光で包まれ、貫かれた。ドサッ、と鈍い音をあげて蝶が地に転がる。それきり、動きだす気配はない。
……だが、これでも、真に倒したとは言いきれないのだ。
「すまない……」
振り返り、ライアはそう告げた。長剣を変化させ、額に装着する。
「いや……」
風使イオは、首を横に振るだけである。

「街中がひどいことになってる。こいつらだっていつまた動きだすかわからないだろ。どうする？」

尋ねるのは水使ユーマだ。碧眼に、青い髪。普段の街ならば、その姿で歩くだけで大変な違和感を招くだろうが……幸か不幸か、現在は非常時である。

「ガースをなんとかする」

ぽつりと、あきらが口を開いた。三人の視線が一斉に集中した。

「ガースの居場所を捜す。どこでもいいから、高い所にあきらを連れてって」

毅然として、あきらは三人のライエスに、そんな命令を下したのだ。

第四章　大破壊

I

遠くの空からは、動揺や狼狽の気配が伝わってくる。大した騒ぎになっているようだ。この小学校までは、まだその余波は届いていない。奏太はふと目を上げた。

「ああ、君……」

まだ幼い少年――低学年らしい――が、きょとんとしてそこに立ち尽くしている。確かに、咲き乱れる桜と散乱するアサガオやヒマワリ――教材として使われる種を、奏太が失敬したのである――のコントラストは、異様なものとして彼の目に映っただろう。奏太は小さく笑った。

「今日は、学校はお休みになるはずだ。家に帰ったほうがいいよ……気をつけてね」

そう、今日はここで遊ばないほうがいいのだ。

大きな落とし穴が、口を開けて待っているのだから……。

貢が——水使ユーマが、あきらの靴を忘れなかったのは流石というべきだった。

「高い所……？　ビルの屋上とか？」

「車道は大渋滞している。避けたほうがいい」

ユーマが首をかしげ、イオが低く忠告する。

「ここからだと……」

決断は、ライアの役目だった。自然、彼はリーダーにならざるを得ない立場にあるのだ。

「駅だ。高架線もある」

最短距離。多少の妨害なら、三人いれば切り抜けられるだろう。私鉄S駅までは裏道を使って五分で行ける。駅ビルと一体になった、立派な建物だ。使えるはずだった。

「走れるな？」

あきらに確認する。スニーカーをなじませたあきらがこくりと頷き、次いでふと眉をひそめた。

「――――」

気付いたのは後の二人も同時だった。はっ、とイオの腕がのびてライアの肩をつかんだ。

やわらかく、だが素早くライアがそれを振りほどく。

「大丈夫だ」
しかし胸元を切り裂いた傷を見逃すほど、イオの目は甘くなかった。隠したところで、出血は抑えようがないのだ。
「羽、か？」
「――聖光石（メタリエ）並みに切れ味がよろしくてね」
交錯（こうさく）の一瞬で、巨大蝶はそれだけの傷を彼に負わせていた……。
そこには確かに殺意が存在する。あれはあきらを殺すつもりだったのだ。
あきらは何も言わなかった。衛（ライア）が大丈夫と言う以上は信じなければならない。そして現在の目的を見失ってもならない。
彼らは守護者（ライエス）であって……その事実を、あきらは尊重せねばならない。
「行くよ」
冷たいほどきっぱりと、あきらが言った。
三人のライエスは、それぞれの表情を刻んで面（おもて）を上げる。守るべき存在は、彼らの目の前にいた。

午前七時五十分。

本来なら通学通勤のラッシュでにぎわう頃である。だが今朝の改札は、普段とは質の異なる混乱に満ちあふれていた。

「閉鎖だ！」

自衛官が駅長に詰めよる。

「駅は閉鎖しろ、電車もどうせ止まっちまうんだ！　一般人には屋内退避を命じる！」

ともかくこの地域から脱出しようと考えた者、何も知らずに学校へ行こうとする制服姿、駅ビルの従業員、警官、自衛隊員、報道陣、野次馬に至るまで……。

新しく建て直されたばかりの駅構内では、様々な種類の人間が右に左にうごめいている。ひっきりなしに放送が入り、現在の状況を伝える。改札口の前にはロープが張られ、人々の流れを押しとどめた。

そこへ、である。

何か、突風が階段を駆けのぼってきたようだった。

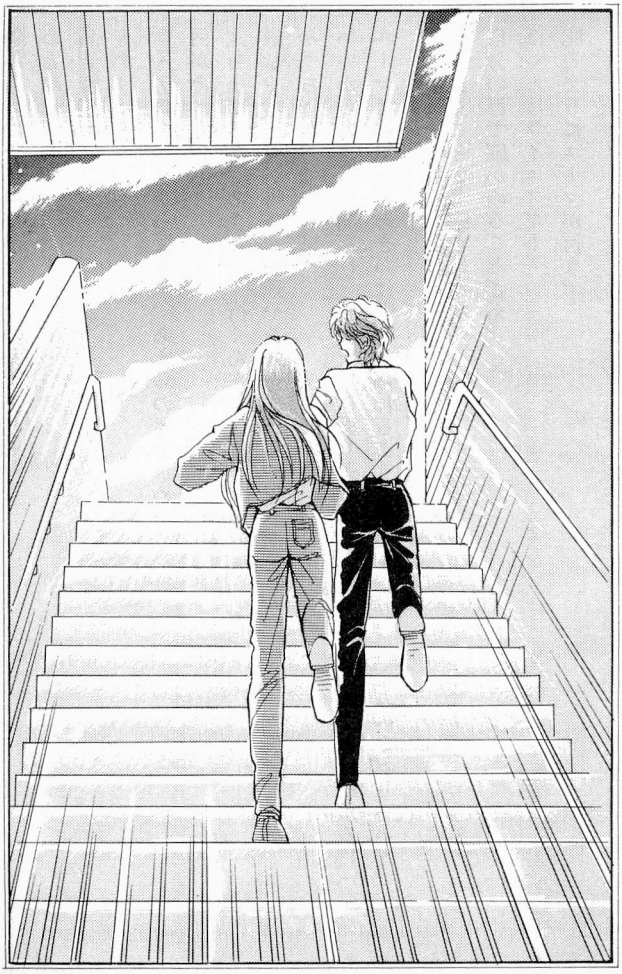
金と、茶と、青の残像だけが目の前を走り――。

「来た来た来たーっ!!」

背後へ視線を投げ、ユーマが叫んだ。

「ザード、道を開け！」
イオの命は、かなり強引である。
ゴウッ、と人波の間に強風が割りこみ、階段から改札口までの直線をつないだ。まるでモーセの起こした奇跡の再現とばかりに、人間の海が真っ二つに分かれたのだ。
「ルナク、花火でも見せてやれ！」
ライアが後方に向けて片腕を振った。地面をのたうちアスファルトさえ砕きながら、迫ってくるのは無数の木の根である。
「しつこい！」
先頭を走るあきらの首筋めがけて、スルスルと太い根が伸びてきた。無理やり振りきったあきらは階段を踏み外しかけてユーマの手に支えられる。直後、背後では小さく凝縮された光の塊が時間差をおいていくつも爆発した。
爆竹のようだが、まぎれもなくライアの放った光の防御網だ。痛い目にでも遭ったか、追跡者どもは宙でぐらつき、火種に当たらぬよう進路を求めてさまよった。
「うわっ!?」
立入禁止のロープを張っていた駅員が、悲鳴をあげて飛びのいた。
長い髪の少女が、ハードルの要領でロープを一気に跳び越す。ほとんど肩を並べて、青っぽ

い少年が同様に駆けぬけていった。
「待てっ！　ホームに行っちゃいかんっ！」
制止の声も無駄だった。
「失礼」
イオがかまわずロープを断ち切り、無愛想な一言を残して改札を走り過ぎる。
「人を避難させて下さい。奴ら、全部ここへ集まりますよ」
そう、有益な忠告を果たせたのはライアだけだった。が、それにしたところで、目にも止まらぬ疾走の最中である。どこまで相手に伝わったか怪しいかぎりだ。
あきらはクリーム色に塗られた真新しい階段を全速で駆けのぼってゆく。
エスカレーターもあるが、今は稼動していない。がらんと広い階段。足音がひたすらに響く。
スカートにハイヒール、なんて格好が似合うような女の子じゃなくて、命拾いしたかも知れない。あきらは真剣にそんな事を思ってみたりする。
踊り場を過ぎて、反転。もうひとつ階段を上らなければならない。空が見えた。青く澄んだ、空。
「あきら！」



隣からユーマが声をかける。励ますように。
あと数歩。
高架線路のプラットホームが。
「イオ!!」
ライアの声が下から反響し、あきらの足を止めた。
何があった!?
「立ち止まるな、あきら！　行くんだ!!」
厳しくユーマが叫び、無理やり腕をつかんで先へ進ませた。
「みっちゃん、でもっ!!」
「いいからあきらは前だけ見るんだ!!　振り返るな!!　そのほうがぼくらは助かる!!」
ユーマは本気だ。あきらは引きずられるように階段を上り、ホームへたどりついた。
「そんなのって……!!」
振りむくことさえ許されない。
自分の目で確かめることさえ。
「ぼくらはライエスだ！」
叱るようにユーマが言う。

「だからあきらの重荷になんかなれない。それがぼくらの誇りだ。あきらにはあきらだけの役目があるだろ!?」

「――――」

あきらは唇を噛みしめた。

身体が震えそうだった。守護者（ライエス）とは何なのだろう。そして彼らに守られるエクサールは。

こんな思いをしてまで――。

「ガース!!」

前後左右に広がる街の風景。

その彼方（かなた）へ向けて、あきらは声を絞（しぼ）り出す。

届かないはずがない。

この胸の痛みが、届かないはずはない……！

「ガース、応（こた）えて！　どこにいるのかあきらに教えて!!　ガース!!　おまえの求めるエクサールはここにいる!!」

カッ、と蒼天（そうてん）に稲妻がひらめいた――。

Ⅱ

改札を過ぎて階段にさしかかった所で、ライアは先を走るあきらたちに、やや遅れた。
人々のどよめきと悲鳴。慌てふためいて彼らは左右へ分かれ、妨げる者のない滑らかな床を、黒い塊が猛スピードで侵攻してくる。
復活なった、巨大蟻の軍団である。それを追うように緑色の一反木綿——いや、違った、異様に生長した植物の葉だ——がうねりながら宙を突き進む。
「ディレイ・ルナク！」
階段の上り口。足元には左右に非常灯。頭上には幅広い蛍光灯。その光源の位置を利用して、ライアは『網』を張る。
「天の双星、地の双神、正なる四角に逆十字の封印を!!」
上の二点と下の二点、四つの光点が瞬時に結び合い、その空間に光の障壁を形づくった。交差する光線がそこから先への侵入者を拒むのだ。結界の一種である。
「ライア！」
数歩前を行くイオが振り向き、彼を促した。結界の定着を見届けると、ライアはすかさず身

をひるがえす。階段を駆けあがる彼らの後背で、ガシャガシャと巨大蟻が障壁に突きあたり不快な奇声をあげた。

「奴ら、進化を続けている……そのうち喋りだしてもおかしくないぞ」

「喋るくらいなら害はないが」

ぽつりとイオが答えた。正しい見解といえるだろう。

こちらの世界でガースが狂った前例などないのだ。何が起こるか、想像の範疇を超える……。

彼らは踊り場へ、揃って踏みこむ。すぐ上をユーマとあきらが進んでゆくところだった。

「イオ、左右の守りを……」

ライアが言いかけた——その矢先。

金属音が響きわたり彼の声を消した。そして。

「！」

イオの目が見開かれた。傍らの真新しいエスカレーターが激しく揺れ、その内部よりベルトを突き破って黒いチェーンが彼へと襲いかかったのだ！

「イオ!!」

ライアの声。ガッ！　とイオの左拳が鎖と激突し、第一撃を防いだ。

一瞬のうちに彼の左手には銀色の指輪が現れ、さらに変化して拳を覆う指鞘の形をとって

いた。これが使鍵ザードの、もうひとつの姿なのだ。

「先に行け、ライア！」

イオが短く叫ぶ。鞭のようにチェーンはしなり、再び彼を急襲した。

機械までが、自らの意志を持ち始めたのか？　ライアは頭鎧を外し、力強く長剣を振りはらった。停止していたはずのエスカレーターが、かたかたと震えている。

「イオ、後ろだ！」

それは死角からイオに迫った。

彼は振り向き、そして見た。

壁面の金網が破れ、電流の配線が鋭い切り口もそのままに、まっすぐ彼の身をめがけて伸びてくるのを――。

晴れわたった青空を貫いたのは、一条の稲妻。

強烈な白光が天地を一瞬だけつないだ。次いで大気を裂く轟音。

「いた!!」

あきらが叫んだ。

雷光が導きとなった。あの稲妻が落ちた一点、それが司杖の位置を示しているのだ。
「どこだかわかる!?」
「……グラウンドだ」
目を凝らし、ユーマが答える。
南の方角……。彼は記憶をひっかきまわした。何か、ここから見渡される街の景色とアスヴァルを結びつける要素があったはずだ。
アスヴァル……葉月奏太。
奏太。もちろん偽名なのだが、あるいは司杖の力を用いて、この世界における『肩書き』をアスヴァルは獲得しているかもしれない。その奏太は——来生閃に、何を告げた？
『南小学校六年一組の——』
ひらめいた言葉と、眼前に広がる街並みの内容は、ユーマの胸中でカチリと一致した。
「わかった！」
ユーマはあきらの手を取り、プラットホームを走りだす。
その材料を、アスヴァル自身が意図して提示していたという事実は、未だ彼らの知るところでない。

「ルナク!!」
光使ライアは彼の使鍵の名を呼んだ。とっさにできることと言えば、それしかなかったのだ。
「ルナク、頼む!!」
「駄目だ、ライア!」
銀色の長剣が強く輝いた。イオの制止。
イオの拳が走り、風の壁を生む。だが、蜘蛛の糸のように電線は広がり、ガースの『護り』をもってディレイ・ザードの力を打ち破ろうとした。
ルナクの光がそこへ介入した。
渦を巻く突風に光の粒子が融合する。
うごめく電線はここに新たな抵抗を見出してゆらりと後退した。
「!!」
意識をイオへ向けたことが、ライアに隙を作る原因となった。大きく旋回した黒の鎖はライアの目にも映ったのだが——。
「ライア!!」
ズンッ！　鈍く、肉を断つ音。
黒い槍と化したチェーンは凄まじい勢いでライアの左肩を貫通してみせた。

「くっ！」

声を殺し、ライアは素手で傷口からチェーンを引き抜く。避けきれなかったのだ。心臓だけは狙いから外した。衝撃が胸の傷まで伝わり、鮮血が溢れて半身を紅に染めた。

「馬鹿な……」

イオは力まかせに電線を切り刻もうとする。だがザードの造りだす真空刃は簡単に防がれてしまう。

彼の視界で、ライアの影がバランスを失い揺らめく。血の塊を吐き出し、ライアは長剣を支えに再び毅然として上体を起こした。

「おまえは馬鹿だ、ライア」

歯を食いしばり、押し殺した声でイオが言う。

「だろうな」

ライアは笑ったようだ。

「しかし兄の立場というものがあるだろう、閃？」

電流のスパーク。

エスカレーターのベルトが外れ、大蛇の動きでとぐろを巻く。

「!?」

階段の最上部で、ユーマが息を呑み足を止めた。

彼はすぐに決断しなければならなかったのだ。状況は一目瞭然。ガースの『衝動』はまず邪魔者のライエスたちを排除する方向を選んだらしい。と、すれば――。

一人でも動ける者があきらを連れてこの場を去るが勝ち、なのだ。なのだが。

「ディレイ・ミンス！」

反射的に使鍵を呼んでしまったユーマを、責めることはできない。折しも戦闘の舞台では、身を支えきれずにライアが片膝をつき、火花を散らす電線に迫られてイオが苦闘しているところだった。

しかし、である。

「――！」

重大な問題に、彼は気付く。

「みっちゃん!?」

踵を返そうとしたユーマに、あきらが声をあげた。強く摑まれた手首を、無理やり自分のほうへ引き戻して。

「みっちゃん、どうして!?」
目の前で二人が大変な状況に陥っているのに。
凄惨すぎて、信じられないようなライアの負傷。イオの激しい戦意……鬼気！
「やだ、もうこんなの嫌だ!!　残して行けないよ、みっちゃんひどいよっ!!」
深いショックが、あきらにそんな言葉を叫ばせた。なおもその場を離れようとしながら、鋭くユーマが振り向いた。
「ぼくじゃ駄目なんだ！」
ディレイ・ミンス――〈水〉の使鍵では駄目なのだ。電流の通った機械を相手に水は使えない。逆にライアたちを電撃に巻きこんでしまう！
あきらは絶句した。ライエスも万能の存在ではないのだ。どんな使鍵にも弱点はある……。
「だけど……！」
それでも、言わずにはいられない。
「だけど！　ここで逃げたらあきらはあきらじゃなくなるっ!!」
ユーマが、意表をつかれた様子であきらを見つめ返した。
「確かに……」
ふと、落ちついた声が、階段の下から発された。

その場の誰もが息をつめて、彼の挙動を見守った。かすかに笑みさえ見せて、ライアは長剣を持ち上げる。床から。

「確かに、こんな負け方は、あきらには似合わないな」

何か考えている。とんでもない、何かを。

あきらにはそれがわかった。理由はない。以心伝心？　衛なら、どんな無謀な策に出ても不思議はないのだ。

「少しくらい派手にしても、あきらのためなら、罰は当たらないだろう……多分ね」

そしてライアは剣を逆手に持ちなおす。ユーマが何か言いかけた。イオが目を瞠る。

次の瞬間。

鮮血に濡れた腕で、ライアは長剣を勢いよく足元へ突き立てた……。

激震が起こり、構内のあちこちに深い亀裂が走った。壁が砕け、床が割れた。階段が崩れた。真新しい塗料がその色を失い、コンクリートの残骸にうずもれる。

高架線がひしゃげ、鉄筋が折れまがり、プラットホームは陥没した。信号が狂ったように点滅し、やがてすとんと沈黙した。

下層の階段へ群らがっていた巨大虫の大軍も、降ってきた天井の下敷きになり、身動きに苦

しむ羽目となった。勿論、その程度で息絶えはしなかったが。

その日、よく晴れた青空をバックにS区の中央から大量の土煙がわきあがった様は、実に壮観であったと記録されることになる。

すなわち。

新築されたばかりの駅舎および駅ビルは、ごく一部分無事な場所を除き、再起不能の大崩壊を起こしたのであった。

Ⅲ

かたん、と小石が上から降ってきた。

真っ暗だ。

ひどく埃っぽい。あきらは小さく咳きこんだ。

座りこんだ地面はざらざらしている。砂が撒かれたみたいだった。背中には分厚い壁を感じる。頭上は……上も、ふさがれている。立ちあがったら頭がぶつかりそうだ。

だんだん暗闇に目が慣れてきた。あきらは周囲をぐるりと見回した。完全な闇かと思ったが、上の隙間からほんのごくわずか、陽光が差しこんではいるのだ。

「やあ、お姫様」
不意に、すぐ左手から妙に快活な声がかかった。あきらはぎょっとして振り返った。
「怪我がなくて何よりだ」
壁面に背中を預け、右膝を立てて腕をのせ、不思議とくつろいで座っている影は……
「えーちゃん……？」
「幽霊でも見たのかい？」
彼の目は、暗闇でもやたらとよく見えるのだ。あきらの表情をからかうように、そう告げたのは——おそらく、それは『衛』だった。『ライア』ではなく……。
影に溶けこむ、濃い色の髪。
どこかいたずらっぽい口調。
「……なんで？」
あきらは尋ねる。目的語も何もないが、尋ねずにはいられない。
「駅をね、壊しちゃったんだ。で、我々は現在、その残骸の底に存在するわけさ」
「……や……やっぱり壊しちゃったのかっ」
「破壊させていただきました。それくらいやったほうが、後くされがないからね」
しれっとして衛が言う。予測はしていたものの、あきらは極端な疲労感を覚えた。

後くされがどうのという次元で壊されては、駅のほうも迷惑なだけである。
「み、みっちゃんとせんちゃんは？」
「それなりに脱出しただろう。潰されてはいないと思うよ」
「……いいかげんすぎる……」
「馬鹿だな、仮にもライエスがこの程度の局面を乗りきれないはず、ないだろう？　まあお姫様の争奪戦でとっさに俺に勝てないあたりは、二人ともまだまだ未熟者だけどね……」
そういう問題だろうか？　何かが違う気がする。あきらはコメントを差し控えた。
それよりも、今のこの状況を脱することが重要だろう。
「ぶっ壊したのはいいけど、ガースが……」
言いかけて、あきらは口をつぐむ。
地面に触れた指先が、ぬるりと滑ったのは。
この空洞を占める、濃密な……血の、匂いは。
「……衛」
忘れていた。いや、彼の態度が忘れさせていたのだ。
左肩を貫いた、深すぎる傷は……。
「大丈夫だ、死ぬような怪我じゃない」

衛があきらの問いを先取りして、そう告げる。
「えーちゃんはいつも『大丈夫だ』ばかり言っている……」
押し殺した声で、あきらが呟いた。
暗すぎて、彼の言葉の真実を確かめることはできない。傷の状態も、その表情も。
彼からはあきらの姿がはっきり見えるのに。あきらの知らないあきら自身のことも、衛にはわかっているのに。
あきらは彼のことを何も知らない気がする。——そう、これまで知り得たことも全てが無に帰してしまうような、それは……無力感に近い。
「フェアじゃない」
ぽつんとあきらが言う。
「フェアじゃないな……」
いつも、いつも、結局この関係は崩れていないように思える。
自分だけではない。きっと閃も貢も同様に、こんな寂しい隔絶感を抱きつづけて……けれど願うだけでは心なんて伝わらないから。
どうすれば通じ合えるのか。迷うばかりで優しくするだけ。
「だって本当に大丈夫なんだ」

衛の平然としすぎた返答。かっとあきらの頭に血がのぼった。
「大丈夫って何が!?　無理して無茶して我慢するのが『大丈夫』なんだ!?　そうやってずーっと痛い目とか、苦しい気持ちとか、悲しいこととか、全部全然大丈夫って言って片付けちゃうんだ!?　へえええっ、凄いよね！　御立派だよね!!　イエス・キリストみたいだよね!!　でもあきらはそういうの好きじゃないっ!!」
「――キリストのことはよく知らないけれど、やせ我慢はキリストの境地と別物だと思うよ」
「話をそらすのはずるいっ!!」
「そらしてない。俺はあきらに話しているんだ」
穏やかに、衛が言い聞かせた。
「俺は利己主義だからね、この世界中の全部の人に同じことは言えないよ……。けれど世界中にたったひとり、その人のためなら痛みも悲しみも本当に消える……それを俺は偽善とは思わない。自己犠牲とも言わない。理屈をつける必要もない。
ただ、現実に俺が大丈夫でいられるということなんだ。それだけのことだよ。それはもう誰かのためではなくて、俺のためなんだ」
「……」
あきらは黙りこみ、唇を噛む。

彼が言っていることは、閃の告げた心情とひどく似ている。

耐えること。後悔しないこと。自らの身を犠牲にして、それを犠牲と思わない。——自分自身の幸福に変える。

彼らの毅さを支える精神。

閃と衛の差異は、その思いを向けられる対象の違い、だけだ。

もういないディシス……。

いや、それだけじゃない。あきらは気がついている。もういないディシス、どこにもいないレア。

行き場のない心。

それでも思いは続くのだろうか？　彼らの生命あるかぎり。死ぬまで。死んでも。永久に終わらない、救われない、満たされない渇望。それを至福として彼らが生きるなら。

——永遠の愛？

「嘘はつかないよ。出血が派手に見えるけど、急所は外してあるんだ。動けないような傷だったら、あきらを一緒に引きずりこんだりしない」

あきらの沈黙を、衛は別の意味でとったらしい。

「ただ、もうあと少しだけ休ませてもらえるとありがたいな。せっかくのドサクサだ、有効に

活用しないと……あきら？」

ふと、その声が跡切れる。

あきらは顔を伏せたが、衛の目をごまかせるわけもなかった。

透明な涙が頬を流れ、地面へと落ちる。何度も。

声を出さずに、あきらは泣いていた。泣くのは悔しいから、嫌だったのに。どんな運命が現れても、泣かないかぎり敗北ではないから。まだ戦えるから。

けれど……。

「どうした？」

衛の右手が伸ばされ、濡れた頬にそっと触れた。

深い、深い響きは——その一言の奥底にどんな情念がこめられているのか、覆い隠してしまう。彼が近付くほど、彼は遠ざかるように見える。

それは彼が、胸の内に宿した謎のせいだろうか？

「あのね……あきら、気がついたことがある」

あきらは両の目を閉じる。

暗闇で、無理に見ようとするから不安になる。目に入るものに頼るから、辛くなる。ならば瞳をとじてしまうほうがいい。

「自分はエクサールだ……司杖を操る者だ。それってもう、ガースを見たらわかる。それは本当のこと。あきらがそう生まれたってことだから……それはいい」

「……ああ」

「でも、あきらは、レアじゃないね」

「――――」

不意に、衛の指先が強張る。

あきらには、それがわかった。どんなに抑えても抑えきれない、衛の本心の現れ。

「レアじゃない。もちろん、ディシスでもない……。あきらはあきらにしかなれない」

そうなのだ。

彼らが誰のために戦うのか知っていて、自分が『その人』であり得ないことを告げるのは、彼らに対し残酷でしかないだろう。

なのに、レアを演じきれない自分……。

「ごめんね」

悲しいのは、彼らの心。彼らの愛。その忠誠。

だから涙が溢れて止まらない。せめて嘘がつければよかったのに。

「ごめんね、えーちゃん……」

スッ、とあきらの頬から衛の右手が離れた。無言で。
――傷つけた!?
思わず、あきらはその瞳を見開いてしまう。何も変わらないことがわかっていても。
「！」
息を呑む暇もなかった。
力強い腕が、その肩を攫うように抱き寄せた。
左腕は動かない。無事な右腕だけで、けれど激しく急な勢いで。
何が起こったのか、あきらにはよくわからなかった。気がつくと温かい肩に頬をうずめ、きつく抱きしめる腕を背中に感じて、あきらは身動きもできずにいた。
「馬鹿だな……」
耳元で、囁くような呟きが漏れる。衛の声。
「あきらが、謝る、ことじゃない……」
「……」
「本当に……馬鹿だね、この子は」
あきらが何も答えられずにいると、衛の言葉にはかすかな笑みが含まれた。
「記憶がないのは、あきらの責任じゃない。あきらはあきらだ、何も気に病むことなんかない」

「えーちゃんが……」
震えながら、あきらが彼の名を呼ぶ。
「えーちゃんが、いなくなるのは、嫌だから……」
知っていたのか、と衛は両眼を細める。
が、すぐにその瞳は閉じられた。静かに。
「行かないよ」
一言、そう告げる。抱きしめた、たったひとりの純粋な少女のために。
「どこにも行かない……ずっと、あきらの側にいるよ」

Ⅳ

兄として？　守護者（ライエス）として？　それとも……。
あきらは訊かなかった。その解答はまだ、必要ではなかったのだ。

「……イオ！」
歪（ゆが）んだ線路の上で、ユーマが手を振った。

瓦礫の山を背に、風使イオは軽く跳躍して彼の位置までたどりついた。
「長居できなくなっちゃったぞ」
ユーマが言う。
大破壊が招いたのは、パトカーと報道陣と野次馬くらいなものだ。変に人目につくと、今後の行動に支障が出てくる。この辺をいつまでもうろうろしてはいられない。
「仕方ない……」
イオはそう呟いた。
また、ライアに先を越された。直属のライエスである二人をさしおいてレアを攫ってゆくのだから、遠慮のかけらもない。しかもこれが初めてではないのだ。
もっとも、この傍若無人さがなければライアではない、とも思えるのだが……。
「移動だ。ライアは無謀な奴だが、あきらを巻き添えにするほど愚かでもない」
「けっこう言うよね、おまえも。……あきら、もうガースのほうに向かってるかも知れない。行くか」
二人は意見の一致を見ると、迷わずその場から姿を消した。

しかし……。

その頃、事態は急転の兆しを見せはじめている。

「ガースが……！」

不意に、あきらが小さく声をあげた。

「ガースが呼んでる!?」

「え？」

衛が聞きとがめる。

暗闇。二人だけをとりかこむ、暗黒。その一点の世界。何が、彼女に伝わったのか……。

あきらの瞳は、ここではない別のどこかを把えて、そして見つめている——ガースを。

彼女の意識は空間を超えて、ガースの有り処までたどりついたのか？

「！」

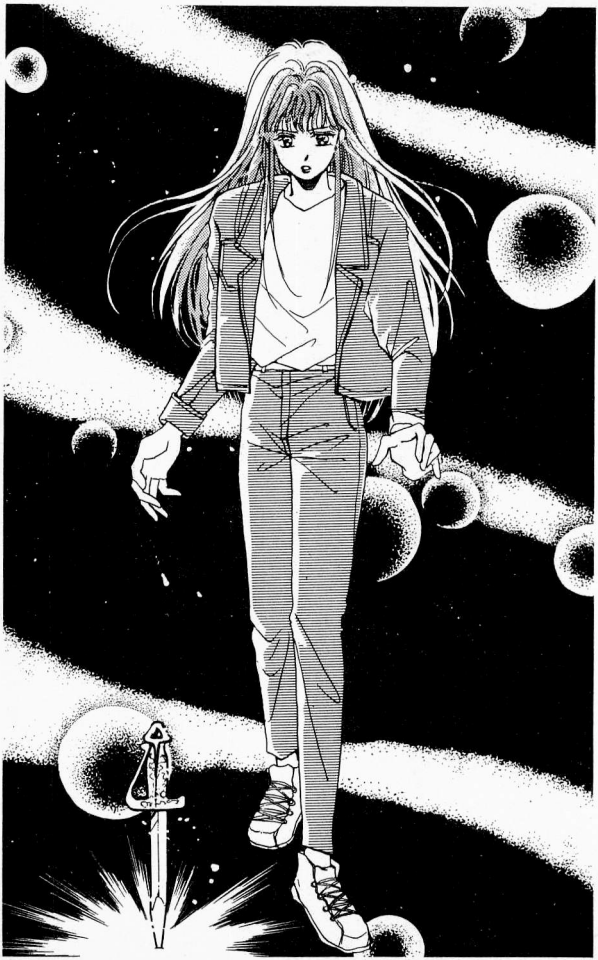
ぐにゃり、と暗闇が歪んだ。

空間転移！

外部からの強圧的な力を、衛は感じる。それはあきらとガースの惹かれあう関係を利用して——二人を呼び寄せた——。

「あきら！」

己の意思に反し、目の前の景色が変わる。鋭く彼は叫んだ。



「ひきずられるな、あきら！　自分の目で見て考えるんだ！」

あたたかい、桜色の世界に、あきらはぽつんと一人で立っていた。
色とりどりの花。そのなかに、ゆったりと腰をおろした少年の姿がある。
「ようこそ」
彼が言う。
その言葉の意味は、あきらにはわからない。
だが、目の前……すぐ足元に。
無造作に突き立てられた、一振りの短刀。
道標のようだった。何かを告げる、目印のようだった。
そして求めてやまない魂の発現。
主の手に還ることを熱望して、それは訴える。無言で語りかける。胸が騒ぐ。何ノタメニ、ドウシテワタシハヒトリデイルノカ。ドウシテ。
おかえり。
そう言って、迎えいれてやろう。ガース。
「私モヒトリダカラ」

悲哀。安らぐ痛み。手を伸ばせば届く心の故郷。
その柄に指をかけて――。
「触れるな、あきら！　罠だ!!」
誰かが叫んだ。ハッ、とあきらは顔を上げた。
葉月奏太がふわりと笑った。
掌のなかで、司杖が一気に力を放出した。
階段を踏み外したときのように、あきらは平衡感覚を失った。

奏太――アスヴァルはすかさず空間を転移し、この世界より消えうせた。
後を追う者は、存在しない。彼は成功したのだ。エクサールを得ることに。
もはや余計な守護者たちに、手出しは許されまい。彼らの能力では、ここまでたどりつくことは不可能であるからだ。

司杖から発生した力の作用と、礼神官アスヴァルの誘導により。
時空の狭間へと、あきらは陥った。その『界境』の名を、〈晶月界〉と呼ぶ……。

――つづく――

【用語解説】

琅月界……球形の閉鎖世界。月斎の地と呼ばれる。多元世界のなかで、もっとも高位に存在し、非常に恵み栄えた。

烟月界……物質と精神の世界。現代の地球社会そのもの。

エクサール（界使）……「祝福を運ぶ乙女」。異次元世界への扉をひらき、その二つの世界のあいだに流れるエネルギーを制御する。他の界からエール（因果力）をとりこむことで、こちら側に「奇跡」をおこすことができる。突然変異的に生まれ、不老にして長寿。

エール（因果力）……世界・存在を成立させるためのエネルギー。

エイダ（在気）……存在・人物が発する固有の波動。

ライエノーツ（守護師団）……エクサールを悪用せんとする者から彼女を護衛し、教育し、最も身近な相談相手としても仕える、特殊能力をもった戦闘集団。

ライエス（守護者）……ライエノーツの一員。優れた頭脳、強靱な身体、高潔なる精神、精老から伝授されたディレイ（使鍵）、これらのうちいずれが欠けてもライエスとは呼ばれない。多くの候補者のうち、厳しい選抜をのりこえて条件を満たした者だけがライエスとなる。直属す

るエクサールがその座にあるかぎり、彼らも不老である。彼女が世を去り、次代のエクサールが生まれ、ディレイが他の者に譲り渡された時点で、死が訪れる。

ディレイ（使鍵）……自然界と交信する資格のひとつ。ライエスが特殊能力を発揮するための必須条件。

〈付〉　ディレイ・ルナク……光を司る使鍵
　　ディレイ・ザード……風を司る使鍵
　　ディレイ・ミンス……水を司る使鍵

精老……生命も肉体ももたぬ、不死の存在。自然のうちに宿る。

神官……精老およびエクサールと交渉をもち、その恵みを人間社会に活用する存在。

央界神殿……琅月界の天の中央にある大神殿。エクサールはここで育ち、ライエノーツの拠点もここに置かれる。

界境の扉……複数の世界の接点。

ガース（司杖）……形状は短刀だが、武器としては使えない。エクサールの能力に指向性を与え、増幅する。黄金色の「メタリエ」（聖光石）でできている。エクサール以外の者が持っても強力な力を与える。

あとがき

では、つれづれなるままにあとがき、行かせていただきます。

あとがき大好き作家と自称しておきながら、近頃どうも切羽詰まったあとがきしか書けなくて、あとがきを楽しみにしてくださる読者さんたち（いるんですねー、こういう奇特な……いやいや、ありがたい方々が）に、「若木さん、手抜きしてませんか？」と叱られてしまった若木です。

いや、一応これには事情があるのです。『炎獄のディアーナ』前編では終わり方がとんでもなかったから、これ書いてさっさと逃げよう！　って感じだったし、後編ではばりきって十枚書いたらページが足りなくて泣く泣く半分削ったし……（リカちゃんの友達のイズミちゃんについては、次のオーラバスターでね。牙の名前の由来も書いてないし。あのこともこのことも書いてない……ちっ）。幻戦記の2巻はいかんせん時間がなくて、頭はハイだったが二ページ分のネタを捨てたのだった。ああ勿体ない。

で、もう本文の内容に気兼ねしてあとがきをセーブするのはやめることにしたのだ。物語のほうはなにやら大変な続き方になってますが、ここから先は別世界ですので、ま、よかったらくつろいでっていただきたい。はい。

ということで新シリーズの開幕です。

この作品で初めてお会いする方には、はじめましての一言を。お会いできて嬉しいです。

前から読んでいてくださる方には、お久しぶり、かな。いつもありがとうございます！　新しい話、どうでしたか？

この本は、私の九冊目の本にあたります。シリーズとしては、コバルト文庫の『ハイスクール・オーラバスター』、スーパーファンタジー文庫の『イズミ幻戦記』、雑誌でやってる『ＸＡＺＳＡ―ザザ―』につづく四番手、となります。

こうして並べると、なんかたくさん働いてるように見えますねえ。特にこの１９９１年という年は、一気に仕事の幅を広げた一年でした。今思うと。（ちなみにこの十二月でデビュー二周年なのだ！　時の流れって早い早い……）

そこで、この『エクサール騎士団』ですが。

続きもののシリーズを並行する以上は、別のシリーズで得られたものの上に安住はしない、

というのが、大前提でした。二番煎じになったら新シリーズをやる意味がない。それくらいなら、新作に手をつけるよりも、進行中のシリーズを煮つめて充実させるほうが絶対いいでしょう？

自分の中に、まだ開拓されていない領域は必ずある。

まだ磨かれていない、手つかずの原石が、どこかに眠っているはず。

進化したい。ゆっくりでもいいから。そしてその進化はあらゆるシリーズに還元されて、作品を向上させる、そういう進化でなきゃ。

そういうことを考えて、この作品を書いてました。自分が何をやりたいのか、今まで何を抑えてきたのか、何を知らずにきたのか、少しずつ探りながら。

やっぱり「これでいいのかな？」って迷いも、最初のうちはあった。「やめといたほうがよかったかな、さっさとオーラバスターの続き書いたほうが、みんな喜ぶかな」なんて。

ところが、気がつくと、滑るみたいにして世界がぐんぐん動き出していたんです！

すごくびっくりした。『彼ら』の存在がどんどん大きくなって、現実感をまして、そこにはもう動かしようのない『エクサール騎士団』だけの物語が生まれて……そうなったら書くしかないじゃないですか。

実はこれ、書いてるときの状況は今までで一番ハードだったんだけど、それでも途中で投げ

出さずにすんだのは、この作品世界自体が私にとって刺激的で、魅力的で、未知のものであったからにほかならないと思います。書いて、書きすすめて、それがどんな結果を生むのか知らずにいられなかった。

これまでの私の作品と、どこがどう変わってるか。それは、読む人が自分で見つけてくれればそれでいい。文章表現かもしれないし、テーマかもしれないし、「でも全然ちがってないよ」かもしれないし、「あっちのほうが好きだわ」かもしれない。

願わくば、楽しんでもらえるように。気に入ってもらえるように。

作者に言えることなんて、その程度なんだよね。

アスヴァルの挑戦は、もうしばらく続きます。全部で三冊くらいになるかな、というのが現在の予想。そういえばタイトルのあとに『1』ってつくのも、1巻からラストが思いきり『つづく』になるのも、この本が初めてだなあ。

頑張って続きを書きます。というより、書かずにいられない。よろしければおつきあいください。

もちろん先行してるシリーズは、これでますます力が入ってしまうこと間違いない。この作品は、古馴染みのオーラバスター、先輩格の幻戦記、二卵性双生児のかたわれみたいなザザ、と、互いに刺激して、触発しあう、そういうシリーズにしたいですね。（ああ、そろそろ古巣が

懐かしいぞ。あ、でもその前にアレが出るのかな……）

それにしても……。

本当、この本はものすごい難産だったので、いまだに書き終わったのが信じられない感じで。なんだかボーッとしてます。

精神的には前述のとおりなんだけど、ハードだったのは物理的に。

ほとんど原稿がたまってない状況で、締め切りの二週間前に大貧血をおこしたときは「もう駄目だ、間に合わない！」と思った。一度ぶっ倒れたら治すのに一週間近くつぶれるって、わかってるくせに倒れちゃったもんだから、もう凄く悔しくて泣いた。もともといつもより締め切りはのばしてもらってあったし、これ以上は無理じゃないか、という世界だったから危機感は激しくて、今まで自分が書いてきたものも信じられなくなったりしてパニックだった。だけど編集部の「大丈夫だ、締め切りギリギリまで待つから、頑張ってなんとか十二月に出そう！」の一言で、やれるだけやろう、と……お医者さんの言うとおり生活を朝型に変えて、睡眠時間だけはとって、神経に悪いからワープロを使うのもやめて手書きにして、毎日のように家族やら友達やらを手伝いに動員して、それでなんとか書いた。特に最後の十日間は、彼女たちがいなかったらどうにもならなかった。凄く感謝してます。電話での励ましも。

残り十日間になって、ようやく迷いが晴れた。少しくらい目眩がしても書ける、本当に書きたかったら頭あがらなくても床にころがって書けばいいんです。甘いこと言ってる場合じゃなかったんだって、よくわかった。こんなんじゃまだまだプロとして半人前。——そりゃ、もちろん、健康な身体で書くのが一番！　これは当然！　ちくしょー早く元気になってやる……。

やってる最中は、こんな修羅場は二度とやりたくない！　と思ったけど、終わっちゃうとなんだか夢みたいだなあ。いったい誰だよ、この原稿書いたの……あ、私か、という感覚。

とにかくこの一冊、いろんな意味で、思い出深いものになってしまったのは確かです。うん、書いてよかった。いやほんとに。

『エクサール・シリーズ』という設定自体は、けっこう昔からたててありまして。『イズミ幻戦記』と同時期に作って、そっちが約一年先に世に出た、と。

で、この話は、完全にキャラクターが先行した例です。ストーリーから考えるもの、エピソードから生まれるもの、仕掛けからできるもの、いろいろありますが、これはねえ……確かあきらちゃんがきっかけだったんだよね。来生あきらという女の子がジーンズ姿で黄金の短刀もって「メサイエ・エクサール・レアだっ！」と名乗ってきたわけです、自分から。

兄ちゃんたちも同様。最初は顔と名前しか見せてくれなかったのが、徐々に、「実はね……」

と自己紹介を始めて、作者の私は突然どっかから降ってくる声をあわててメモしてただけなんですね。で、ひとしきり彼らの話を聞いてから「ちょっと待て、これってもしかして『ファンタジー』の世界なのでは……」と気がついた。

このときまで私は、俗に言うファンタジー的設定で自分が小説を書く、とはまったく思っていなかった。ファンタジーって言葉ものすごく曖昧で、最近はいろんな場所で使われているし、厳密な意味での『ファンタジー』っていうとちょっと違ってきちゃうんだろうけどね……光使ライア、風使イオ、水使ユーマ、と名前を連ねただけで、こりゃファンタジーらしい、と思うよね。普通。

ところが若木未生という物書きは、剣と魔法、精霊と幻獣、はたまた王国と城塞、といったいわゆる異世界ファンタジー（偏見っぽい……。でも一般にはそう思われてるじゃん）の道具だてに縁がなかった。どこかズレちゃう。即物的な言い方になっちゃうけど、結局はそういうこと。読むぶんには好きでも、書くとなると事情が違うのです。

どうせズレるんなら、どんどんズラしちゃえ！

と、開き直ったら、『エクサール騎士団』のできあがりというわけ。

炯月界と琅月界の関係も、使鍵とライエスの関係も、エクサールという存在も、私は大好きですね。ファンタジーであるかどうかは、道具だてよりも本質の問題ですから、本当にファン

タジーしてる、と思われても、全然ファンタジーじゃないじゃん、と思われても、どっちでもそれは正しいと思います。

ジャンルにこだわりすぎるのって、よくないんじゃないか。この頃そう思ってます。ジャンルはあくまで目安じゃないかと。別にそれで物語の面白さが変わるわけでもないし。

そういう意味では、「少女小説」って、幅が広くて自由な、可能性のすごく大きい言葉なのかもしれないねえ……。

メインキャラの皆さんについて、もう少し話そう。なんたって新顔だし。

来生四兄妹の名前は、どれも非常に気に入っております。自画自賛……ははは。でも姓名判断してみたら、来生閃と来生貢ってどの画数もカンペキに同じだった。性格も運勢も一心同体ってわけか？（んなバカな……）

ちなみに来生あきら、来生閃、来生貢の三人は総画数が同じ（二十三画）で『スタミナ野人運』つまりラッキーなうえに根性もあって、敵を作ってもくじけず成功をつかむ、という運の持ち主なんですが、がんばるお兄様の来生衛だけ二十八画で『孤独苦労運』……成功運も物質運も才能もあるけど、トラブルと争いが頻発して、人の誤解をうけやすい……。

偶然とはいえ、やはり名前はあなどれないぞ！　たかが占いっつったら、それまでなんです

けど。ううむ。

（姓名判断にもいろいろあるので、これ以外にも何かキャラクターについて面白い結果が出たら教えてください！）

そういえば本文中であきらちゃんが「狼＝あきら」と連想する理由について「よくわかんない」と言ってましたが、これはね、わかる人はわかるだろうけど、知らない人にはまったくわかるまい。でもわざわざ本文で説明するようなことじゃないし、ここで説明しよう。これはもちろん、平井和正先生の書かれた「ウルフガイ・シリーズ」の主人公、狼人間・犬神明からの発想です。

犬神明、という名前を自分の本のあとがきに書く日が来るとは思わなかったなあ……！　ああ、三行で二回も書いてしまった。嬉しいというより畏れ多い……。私の中学時代は『幻魔大戦』にのめりこみ、『狼の紋章』に感激してのたうちまわった時代なのであります。

あの頃、SFは絶対に、海外ものより日本SFのほうが好きだった。その原因の多くは平井先生の描かれたキャラクターの魅力ではなかったか、と今にして思います。『幻魔大戦』の東丈と、ウルフガイの犬神明。心の奥底に昏い傷痕を隠し、それでもつねに美しい瞳で彼方を見つめ、絶望を強いられながら、なおも孤独な戦いをつづける、そんな少年たち……。

ああああ、駄目だ、どう書いていいかわからなくなってしまった。彼らを語るには、どん

な形容も無意味なのです。

いろんな物語を、小説や、漫画や、映像のかたちで受け取ってきたけれど、ふりかえると私はいつも、強烈な魅力をもつキャラクター、というものを求めつづけてきたようです。誇りたかくうつくしい精神の持ち主に、魅了される。完全無欠な人間じゃなくていい。むしろ自分の弱さを知り、無力を悔いながら、それでも進んでゆく、そんな人がいい。

ドラマはもちろん大切。斬新なストーリーや緻密な設定ももちろん大切。だけどそれだけじゃ作り手の独善になってしまう。物語というのは、色分けされて記号のついた人形たちをコマみたいに動かすものじゃないんだ。ましてや作者の平凡な分身が我がもの顔して動き回る世界でもない。作者が溺愛するキャラクターを褒めちぎるための、品評会の舞台でもない。

強烈なキャラクターの生きざまがそのまま物語をひっぱっていくような、そんな小説を、読みたくなった。

来生四兄妹には、だから、巨大な期待がかかっているのです。わははは、言ってしまった。大まじめにこんなこと書いてると照れてしまうんですけどね……。

おーやー、どうしたのかなあ、今回のあとがきは。

なんだか久しぶりに、すごく落ちついた文章を書いてしまった。（そうそう、この本が出るの

と同時に二十三歳になってしまうのだよ！　やっぱり自然にノリが変わるのかな）

１９９１年が仕事の幅を広げた一年なら、９２年は充実させる一年でしょう、やはり。

物語というのは、ちゃんと完結するまでは、何を言っても通過点における発言にしかならないので……今が一番、もどかしい時期でもありますね。そういえばこの前、「オーラバスターも幻戦記も話の全体が見えてこないけれど、ちゃんとラストまで構成考えて書いてるんですか？」というお手紙が来て、凄くびっくりしました。ラストまで考えてるからこそ、徐々にそこへ向かっていく書き方をしてるわけだし、そんな疑問は話が進んでいけば自然に解消すると思う。要は、まだそれを立証する地点までシリーズが進んでいないってことじゃないか？

商業作家としては、シリーズ構成の腕を疑われたわけで、非常に遺憾なんですが、言いたくなる気持ちはわかる。物語が生殺し中断状態では、やむを得ない。だから作品で返すしかない。

１９９２年は、（特にオーラバスターにおいて）大きな転換があるはずです。何が起こるか!?それは読んでもらうしかない。とにかくここで『第１期オーラバスター完結』というくらいの展開となります。今は、走り出す前に力をためてる段階。

もう少ししたら、会えます。待っててもらえると、うれしいです。

ずいぶんお礼が後のページになってしまいましたが、今回の大恩人は、なんたってイラスト

の羽音こうき様です！　本当に本当に感謝してます。どう言っていいかわからないくらい。

私がぶっ倒れてしまったせいで、原稿が遅れたしわよせは一気に羽音さんに行ってしまったのだけど、厳しいスケジュールで頑張っていただいて、しかもこんなに華麗なイラストをつけてもらえて……私は果報者です。

羽音さんは、月刊パッツィで『バーヴェリアン四重奏』を連載してらっしゃる漫画家さんです♥　単行本の1巻（パッツィコミックス・青磁ビブロス刊）も発売中です。縁って不思議だなあ。エクサールのイラストがなかなか決まらなくて捜し回ってたとき、なにげなく買ってあったコミックスを見たら、パッとひらめいたの。あっ、この人！　って。

快く引き受けてくださって、ありがとうございました。今度打ち上げしましょう！

さて、そろそろお開きにしないと、この本は用語解説もあるし……。

相変わらず、お手紙は大歓迎しております。返信用封筒を入れておかないと返事を出さないんですか？　と訊かれましたが、そんなことはないです。ただ、単純に、返信用封筒があると返事を送るのが格段に早い！　というわけです。（言い換えると、返信用封筒が入ってないものは返事がやたら遅れているんです、この頃……。すまーん）

そういえば返信用封筒とは何か？　という質問もあった。返信用封筒とは、普通の封筒の宛

て名に自分の住所氏名を書き六十二円切手を貼ったもの、のことをいいます。これがあれば、こちらは中身を入れて送り返すだけだから楽なんです。郵便局では売ってないぞ。

では、今回はこのへんで。またお会いしましょう。

若木未生

SPECIAL THANKS TO……

Mr. KATO, Miss. YOKO ENOKI, Miss. TAMAKO MAEDA,
T-sugi M-ko, KAZUKI・S, YUKI・I, my parents & sisters,
Miss. KOKI HAOTO, Mr. KAWANO the great, …and YOU.

《追記1》若木未生黙認FC『プラーミア』なる謎の集団（？）が活動中です。詳しいことを知りたい人は、返信用封筒同封で、若木あて（感想のお手紙と同じ宛て先）にお便りください。そうするとプラーミア本部から案内書が送られてきます。
なお、コバルト編集部とは無関係のサークルですから、電話などで問い合わせないようお願いします。

《追記2》十一月三日、四日、広島におけるファンの集いおよびサイン会へ御来場くださった皆様へ。

結局どうしても体調が回復せず欠席してしまったこと、ここで深くお詫び申し上げます。日向先生、小山先生、関係者の皆さんにも、大変な御迷惑をおかけしてしまいました。本当に、申し訳ありません。

どうして、よりによって、あの（！）広島へ行けなかったのか、未だに悔やんでも悔やみきれない気持ちです。かくなるうえは、いつか必ずこの雪辱戦を広島で行いたい。このままじゃ気が済まない。

とにかく今は、ごめんなさいのひとことを言わせてください。

この作品のご感想をお寄せください。

若木未生先生へのお手紙のあて先

〒101―50　東京都千代田区一ツ橋2―5―10
集英社コバルト編集部　気付
若木未生先生

わかぎ・みお

1968年12月２日、埼玉県生まれ。射手座。Ａ型。現在、早稲田大学文学部在学中。1989年４月『ＡＧＥ』で、第13回コバルト・ノヘル大賞佳作入選。好きなものはマンガと音楽。週刊少年ジャンプをこよなく愛する。苦手なものは料理。コバルト文庫に『天使はうまく踊れない』『セイレーンの聖母』『十字架の少女』『迷える羊に愛の手を』『炎獄のディアーナ（前編）（後編）』がある。



エクサール騎士団 1

COBALT-SERIES

1991年12月10日　第１刷発行
1992年11月25日　第４刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　若木未生

発行者　若菜正

発行所　株式会社 集英社

〒101-50
東京都千代田区一ツ橋２－５－10
(3230)６２６８(編集)
電話　東京 (3230)６３９３(販売)
(3230)６０８０(制作)

印刷所　大日本印刷株式会社

©MIO WAKAGI 1991

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611591-3 C0193

コバルト ノベル大賞 募集中！

『COBALT』編集部では、「コバルト・ノベル大賞」を募集しています。この賞は、才能ある作家志望のかたを、新人作家として世に送り出すためばかりではなく、小説を書くことの楽しさ、創作することの喜びを広く若いかたたちにも味わっていただきたい、という願いもこめて設置されたものです。

ロマンの新しい時代を切りひらく、あなたのフレッシュな力作100枚前後（400字詰原稿用紙95枚以上105枚以下）を、お待ちしております。

〈入選作〉 **正賞の盾と副賞100万円**

〈佳　作〉 **正賞の盾と副賞 50万円**

応募要項は隔月刊「COBALT」に毎号掲載されています。

恋を夢みる乙女のための小説誌！

［コバルト］

Cobalt

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売！

隔月刊ですので、お求めになりにくいこともあります。あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

●「コバルト短編小説新人賞」「ショート・ショート」を毎号募集しています。